

『だんごだんごがどっこいしょ』

福島県双葉郡川内村の民話

千葉大学日本文化研究会
民話分科会編

本書は、一九八二年（昭和五七年）十一月一日に発行された手書き謄写版刷りの民俗調査報告書の『だんごだんごがどっこいしょ』（福島県双葉郡川内村の民話）をリポジット公開用に活字化した覆刻版です。

本書を作成するにあたっては、明らかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使い分け、および句読点の位置の変更等をおこなっています。

また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のままで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重して、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

はじめに

調査も終わりに近づいたある晩、私達は蛍を見に、コミユニティセンター近くの田んぼに出かけました。まっくら闇に広がる稲田、裏手の森の木々。そこには無数の小さな灯が飛びかい明滅していました。思わず歓声を上げる者、皆から離れてひとり畦道にくんだり、もの思いにふける者。皆それぞれ、大きな感動を得たようでした。

蛍が飛ぶことも、光るということも私達はよく知っています。それでも、その晩私達は蛍のわびしげな光に吸いつけられるように見惚れてしまいました。

「僕らはこんなにも本当の感動を忘れてしまっていたのか。どんなに知識をたくわえても、肌で感じるものを失ってしまつてはならないな」

ふと、そんな思いにかられたのです。

民話も蛍と同じではないかと思えます。本屋さんに行けば山のように民話の本がありますし、テレビでも民話漫画

が放送されています。けれども、そこには民話の本来の姿である「語り」は見られません。語り手と聞き手。この二人の人間さえいれば、あとは何の道具もいらぬ「語り」。私達はそこに何か不思議な魅力を見出すのです。

話の筋を知っているのにどんだん語りのなかに引き込まれてしまう、そんな体験を調査をしながら私達は幾度も体験しました。たまたま来あわせていた若い方が、ついおばあちゃんの昔語りにつり込まれて最後まで聞き、

「そう言えば俺も・・・」

と、自分の体験談を話してくださいました。何の変哲もないキツネやサルの話が、ひとたび「語り」の輪の中に入ると、実に活き活きと私達の心の中に響いてくるのです。そこには、私達誰もが持っている人としての優しさが、常に流れているに違いありません。

私達は、自分達が肌で聞いたお話を、一人でも多くの方に知っていただきたいと思い、このつたない民話集「だんごがどっこいしょ」をつくりました。この冊子を読まれた

方が民話に興味をもたれ、今度はご自身の肌で「語り」を聞こうとなさってくださいるなら、私達にとってこんな嬉しいことはありません。

最後に、調査にあたって私達をあたたかく迎えてくださった川内村の皆様にお礼を申し上げます。

一九八二年 紅葉色づく頃

民話分科会一同

【民話集の本文について】

この民話集に収められた民話は、昭和五十七年七月に福島県双葉郡川内村で採集したものです。同年三月に行った予備調査時に採集した話も補遺として巻末に付しました。

「昔話」及び「伝説」に大別しましたが、この両者の区別は必ずしも明確ではなく、一部に分類のあいまいな話があることをおことわりしておきます。

話はすべて、村の皆さんがお話しくださるのを直接テープレコーダーにおさめ、再びテープから文字になおしたものです。文字化にあたっては、できる限り原音に忠実であるよう心掛けましたが、極端にわかりづらい場合には（ ）を付して読者の便をはかりました。

題名は、編者が便宜的に付けたものです。配列は、なるべく同様の話を一か所に集めるようにしました。

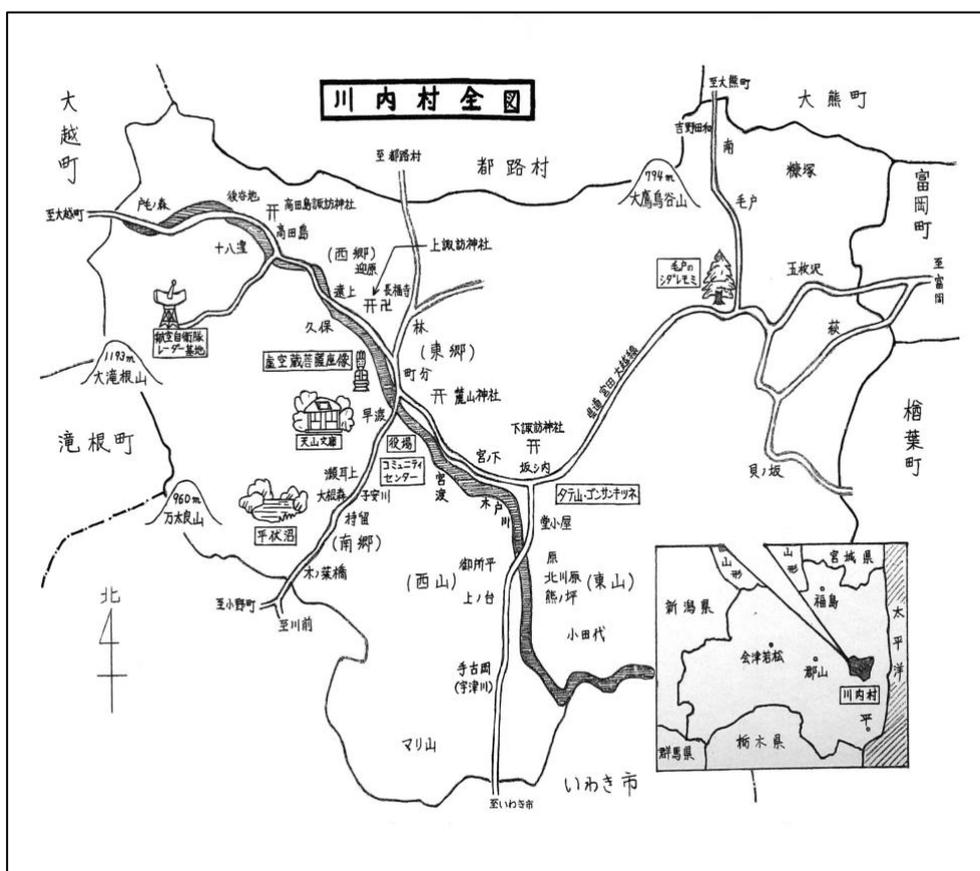
我々の力不足ゆえ、不完全な箇所や誤記等もあるかと思いますが、ご了承ください。

川内村について

福島県双葉郡川内村^{かわうち}は県東部、阿武隈山脈の山懐^{やまふところ}に位置する農山村です。平均標高は、四〇〇〜六〇〇メートル。

最高峰は大滝根山で一一九三メートルあります。また、村内を木戸川が南流し、支流も多く見られます。面積は二〇〇平方キロメートルで、そのうち約九六％が山林となっており、耕地はわずか七平方キロメートルにすぎません。人口は四三〇〇余人。第一産業従業者が約一二〇〇名で主産業は農業と公有林業です。農産物出荷額では「葉たばこ」「米」「酪農品」が上位を占めています。また、高塚山を中心に阿武隈中部県立公園が広がり、春秋には多くのハイカーでにぎわいます。

村の歴史は古く、村内上河内の諏訪神社は、永享二年（一四三〇年）の開社とされています。現在の川内村は、明治二十二年四月に上川内村と下川内村が合併し、現在も村の西半分、行政区一区から四区までを上川内、東半分の五区



から八区までを下川内と呼んでいます。バス路線が富岡と小野新町を結んでいます。交通は不便で人口減少が続きます。村では村営住宅の建設や観光開発にも力をいれています。

もくじ

はじめに 二

川内村について 四

川内村地図 四

【昔話】

まんじゅう問答※採話地区名(堂小屋) 八

うそつき息子の話(久保) 一〇

うそつき名人の話(堂小屋) 一一

河童駒引き(平沢) 一二

うばすて山(久保) 一四

うばすて山(長網) 一四

親孝行の話(久保) 一五

かえる女房(堂小屋) 一六

猿のむこ入り(堂小屋) 一六

猿のむこ入り(平沢) 一九

蛇のむこ入り(沢) 二〇

蛙と猿の競争(堂小屋) 二二

馬鹿むこの見合い(沢) 二三

馬鹿むこの正月まわり(久保) 二四

馬鹿むこの備前焼(沢) 二五

馬鹿むことたくわん(瀬耳上) 二五

馬鹿むこと頭巾(平沢) 二七

馬鹿むこと菜っ葉(沢) 二七

馬鹿むこと団子(久保) 二八

馬鹿むこと団子(沢) 二九

馬鹿むこと団子(堂小屋) 三〇

馬鹿むこと団子(平沢) 三一

馬鹿むこと団子(宇津川) 三二

馬鹿むこと団子(瀬耳上) 三三

馬鹿むこの山賊退治(関場) 三四

運のよいむこ(堂小屋) 三五

狸の仕返し(堂小屋) 三七

おならの身がわり(平沢) 三八

屁ひり女房(堂小屋) 三九

カカトはずし(宇津川)・・・・・・・・・・	四一
桃太郎(沢)・・・・・・・・・・	四一
花咲かじじい(沢)・・・・・・・・・・	四三
かちかち山(沢)・・・・・・・・・・	四五
千匹のネズミが京見物に行く話(堂小屋)・・・・・・・・	四八
長い話(久保)・・・・・・・・・・	四九
虎(山猫)が化ける話(沢)・・・・・・・・・・	五一
化けネズミの話(沢)・・・・・・・・・・	五三
化け物の話(早渡)・・・・・・・・・・	五五
ひとくちばなし(早渡)・・・・・・・・・・	五六
ふんどしの川流れ(堂小屋)・・・・・・・・・・	五七
昔ばなし(旅人殺しの話)(早渡)・・・・・・・・・・	五八

【伝説】

しだれ縦の由来と金の鶏(堂小屋)・・・・・・・・・・	六〇
法印様とキツネ(堂小屋)・・・・・・・・・・	六一
だいらギツネの話(堂小屋)・・・・・・・・・・	六六
木挽きとゴウシユウさん狐(平沢)・・・・・・・・・・	六六

小学校の先生とゴウシユウさんギツネ(平沢)・・・・・・・・	六八
キツネに化かされた話その一(大根森)・・・・・・・・	六八
キツネに化かされた話その二(林)・・・・・・・・	七〇
キツネ火その一(長網)・・・・・・・・	七〇
キツネ火その二(林)・・・・・・・・	七〇
キツネの嫁入り(持留)・・・・・・・・	七一
キツネの話(林)・・・・・・・・	七一
キツネに化かされた話(宇津川)・・・・・・・・	七二
カワウンとキツネ(堂小屋)・・・・・・・・	七三
カイコ様の話(宇津川)・・・・・・・・	七五
大蛇のたたり(宇津川)・・・・・・・・	七六
大蛇のたたり(堂小屋)・・・・・・・・	七六
松川原堤の大蛇退治(堂小屋)・・・・・・・・	七九
大蛇のたたり(平沢)・・・・・・・・	八〇
大蛇の神の由来(平沢)・・・・・・・・	八一
大工の弟子が御神体を見たがる話(宇津川)・・・・・・・・	八二
祭りの前にシモゴイをくんだ人の話(宇津川)・・・・・・・・	八二

【昔話】

まんじゅう問答

(採話地区名)
(堂小屋)

坊さんの仲間には法問という、ひとつの試験問題だな、
(があるんだ)。その問答をやってその答が、住職がうまく
いなければ、

「まいった」

と言ってそこ(寺)を出なければなんねえ。

そして今度、問答して勝った人さ。その住職になるんだ。

あるお寺さ、

「あしたの午前八時頃、法問掛かけが来る」

と。それでその住職は、

「あー困った。これ明日は法問掛が来てどんなこと掛っかわかんねけつとも、答案ができなければ、俺はこのお寺からしっちゃんなんねえ(出てゆかねばならない)」

と、心配してたらば、門前にあるまんじゅう屋のじさまが

来たわけだ。(じさまは、いろいろわけを聞くと)、

「なにも心配することねえ。それほど心配なら俺、坊様のかわりに問答に出っか」

(と言った。坊様は、)

「したらひとつ頼むで。俺、うまくいくってことねえから(と言った)。そうなって、まんじゅう屋のじいさんが(用意して)寺に行いたと。

案の定、午前八時頃になったら法問掛が来たわけだ。山門くぐって来たんだと。スタコラストコロと。

そいでまず、来っかこねえに、法問掛が指で小さな輪をつくった。黙ってやんだな、こういうのは。口は使わねえ。

そうしたらほれ、まんじゅう屋のじさまは両手で輪をつくった。こんどは法問掛が指一本出した。

したところが、まんじゅう屋のじさまは指五本出した。

今度、法問掛けるほうでは、指三本出した。そこでまんじゅう屋がアカンベーをした。そしたら、

「まいった」

と、法問掛はスタコラストタコラ行っちゃった。

坊様は、何やっただかなあ、まんじゅう屋は、なじようなわけやったのかって（どのようなことをしたのか聞いた）。するとまんじゅう屋は、

「なーに、やつこさんくつか来ねに、『腹へった』とやっただ。ならば『こういうまんじゅうがあんだ』と。『ひとつなんぼ（いくら）だ』とやるから、『ひとつ五文だ』と。そしたら、『三文にまける』とやるからアカンベをしたら、スタコラストタコラ行っちゃった」

「なんだ、そんなことかと、坊様は笑った。

だが、後にその法問掛が解説したところによると、これは大変な意味があったんだって。

まず、指の小さな輪で

「天地はいかに」

と問うと、

「^{まろ}円く照らす」※

指一本で、

「一天四海は」※

と問うと、

「五行におさまる」

指三本で、

「三千世界は」

と問うと、

「目の下にある」

そういう宗教の質問を、まんじゅう屋はまんじゅうの値段のようなわけで、たやすく答えたのだが、法問掛のほうでは、理にかなった答と受けとって、

「こんな坊様のいる寺は、のっとれねえ」と、スタコラストタコラ行っちゃまったんだと。

※ 印の部分については、話者の方がよく覚えていらっしやらなかったので、編集者が、一般的に多く語られている者を挿入し、読みやすいように致しました。

うそばっかりついている息子があつたんだってな。ある人にうそついて、

「いや、今日はたいしたとこさいつてきた」
とか。

「いや、たいしたもの見てきた」

とかつて言うんだってな。そうして(その父親は、

「この野郎は、いつでもうそばっかりついつてつてから」
つて、

「だめだ、川さ流しちまなんねえ」
つて。

そして、俵さつめて昔は、川さ、じゃぼんと投げつとした。
そうしたら、

「ああ、父ちゃん父ちゃん、たいしたもの忘れてきたから、早くといてくれよ」

「といてやつからすぐ来いよ」

「うん、すぐくつから」

つて。そして(息子は)家さもどつたんだってな。そしてもどつてきて、また俵さ入つてじゃぼんと投げるうちに、

「父ちゃん、また戸棚さ、宝もの忘れてきたから」
つてゆつたら、

「おめえいつたつて(もどつてくるかどうか)わかんねえから、逃げられつとしょんねえから、じゃあ俺行つてくつから、ここさいろ」

つて、橋の上さ、俵さ入れて、しばつておいただつて。ほしたら、あんまかつちやかつちやかつて(つえを)つてきただと。それで、俵をつつくんだと。そのあんまがな。

「なんじゃあ、わしのことつつくのは」
「俺だ、俺だ。あんまでござる」

「ああ、あんまさんか。いやあんまさん、この俵さいれられつちやら、俺もあんまだつたのを目があいた」

「ほんじゃら、俺も入れてください」
そして こんど、といてもらつて、あんまをしばつて入れ

て、そしてかくつち見てただって。

ほしたら、

「またうそついた、この野郎。いつでももうそばかりついてって、おとつあまがおこって帰って来て、そして、そのあんまを投げてしまった。そしたら、

「あんまでござる、あんまでござる」
って、入った人が言うだって。

「あんまもくそもあつか、またうそついて」
ほつで、がぼーんと投げたって。

そしたら四、五日たったら帰ってきただと。

「いや父ちゃん、うんといいとこさ行ってきた、おら。竜宮城ってあのこった」

って。(息子は) 帰ってきてうそ(をついた) またな。ほれをこんど、父ちゃんが聞いて、

「ほら、こんど父ちゃんも行くだ」
って。(息子は) 父ちゃんこと こんだ (俵に) 入れて、ほんとに流してやったって。

うそつき名人の話

(堂小屋)

(一)

上川内と下川内には、うそつきの名人がいたそうだ。これは、下のうそつきか上のうそつきか、どっちもうそつきの名人なんだ。うそつくにもいろいろあるんだ。(さて、ある) 大風のあった明日、上川内からその上川内のうそつきが下にやってきた。

「いや、ゆんべの風はとても非常に激しかったが、おらんとこの釣り鐘がふつとんじやった。だから下川内さ、ふつとんで来たつへ」

と。下のうそつきの息子は、そいつ聞いたが、やつこさん、いよいようそをついてきたなと(思ったんだ)。そして

「ウーン何でもその釣り鐘がおらや(我が家)の蔵んとこのクモの糸さひつかかって、ゴーンゴーンと一晚なつて、おら、ねむらんなかった」

下のうそつきの息子はそういうふうにうそをついたと。

(二)

それから、

「父ちゃん母ちゃん、どこさ行った」

って上のうそつきが聞いた。すると、

「海の底が抜けとって（抜けそうだから）線香三本でつっぱれた（支えた）んだよ。それで朝から行っちゃまって、いねえ。俺一人だ」

（と言った）。すると、

「いやこの下のうそつきもこういうふうには息子がうそつくでは、親父はもつとうそつくだな」

と、上のうそつきは、息子にしてやらっちゃって、行っちゃったと。

河童駒引き

(平沢)

馬さ水びたし水ひたし、水あびさせてってそうしているうちに、河童が出てきてな、そして食うべとしたっぺけれども、なかなか馬では食えねえから、そして今度、河童は、我が手ではかなわねえと思って、我が胴さ、綱ゆいつけて、そして水さ入ってたんだって。そうして馬はたまげて一目散に我が家さはねてきた。そして、するべてきたっちゃけんだ（ひっぱってきてしまったのだ）、河童も。そして、馬に飼料かせる（食べさせる）桶だな、そしてそのふね（飼、薬桶）の下さかくれていたんだって。

そして、馬の飼い主が馬にかすべ（食べさせよう）と思つてひっくり返すと、ふねの下から出たんだって、河童が。何だかわかんねえから、たまげたげによんだが、

「俺は河童で、馬にするべってきたっちゃだから助けてくれよ。それから、助けてくれれば骨つぎの妙薬をおせっから」と。そしてその人に骨つぎをおしえやったんだ。そして、

おっぱなしてやった。そして河童総伝骨つぎの妙薬って、
そこでできたもんだ。

【みちくさ】 かつばのおはなし

芥川龍之介は「河童」という小説を残しています。そこ
に説明された河童の姿をまとめると次の様になります。

『頭に短い毛があり、手足に水かきがついている。身長は
一メートルをこえるかこえぬ位で、体重は二十〜三十ポ
ンド（約二三キログラム）の大河童もいる。頭のまん中には
楕円形の皿がある。皮ふはカメレオンのように周囲と同じ
色に変わってしまう。カンガルウのように腹に袋をもつて
いる。・・・』

河童のおなかに袋があるなんておもしろいですね。

ところで、河童が日本原産であることはみなさんご存じ
でしょうか。河童の英語名は、Kappa（もしくは、
Water impなど）、伝説などに登場するのは日本だ
けです。

そうはいつても、孫悟空そんごくうと一緒に天竺てんじくに行った沙悟浄さごじょうは、
河童であったはず・・・と思う方も多いことでしょう。け
れども、『西遊記』の原本には、沙悟浄は流沙河という大河
に住んでいた大入道と書かれているそうです。沙悟浄を河
童にしてしまったのは、日本人だったのです。

※覆刻版注記

【みちくさ】・・・当時、民話の採話調査に訪れた学生た
ちが残した感想文をもとにして掲載しています。

うばすて山

(久保)

親をすてていくには、かわいそうだっぺ。だから(その子供は)いぐ途中、(親が)帰り道忘れつとしよんねえからつて、こう帰るとき、親をおいてくつとき、木いちよつちよつとおいてつていったつてな。(親は)帰りその木をめあてに帰ってきたんだつて。

(うばすて山は) ころらへんにあんだ、そつちこつちに、部落部落にな。「山居の沢」つてゆうんだ。

うばすて山

(長網ながあみ)

六十になつと、もう石いつぶしだから、山にもつてつて投げるといふことだ。(その山は)どこの部落にもあつたらしんです。うちから、つまりその部落から少し離れたところ

ろにね。そういうところに捨てるわけなんだが、ある孝行な息子が、どうしても親を投げるできないと、こういうわけで、あの縁の下な、その下に置いて、毎日ごはんをあてて食べさせているうちに、殿様から、

「あくでなわをよつて来い」

と。

「もじつて来い」

と。

ところが、困ってしまったて、(すると)

「何困つてんだ」と。親が下から声かけたらば、

「殿様から、そのあくでなわをもじれ、言われたので、困つてんだ」

と(息子は言った。すると親は)、

「しんぺい(心配)すんな」

と。

「なわを持って来て、トタンの上さあげて燃しなさい」と。

「そして燃やしたのをそのまま殿様に献上しろ」

と（教えてくれた）。

そして殿様に持っていったところが、

「これは誰が教えた」

と（言った。息子は、

「これは実は、殿様にすまねえわけだが、実は親を投げんのがもったいなくて、こうこうこういうわけだったんだが、困って。そういう話をしたらば、こういうわけだと教えられて、今ここに至ったわけだ」

と（言った）。

殿様は感心して、

「決して六十になった人でも投げてはいけない」

と（言った）。

こういう話のわけです。

親孝行の話

（久保）

親孝行の子供がな、あのなんついたらいいがな、親年取って、はあ、仕事できねえからって、御飯ごはんあてがってたんだな。ほうしたら、親孝行の息子は、

「おれは、そうゆうことは絶対しねえ」

つちゆう覚悟したわけなんだな。ほして、このえいさいつてゆつただか、その家の息子だからねえが、（親が）食べる茶碗を、きたなあいの、洗ったこともねえのでかsettってんだな。ほしたら、この孫が作ったんだと、茶碗を、木い掘って、こう。

「これ何すんだ」

つつつたら、

「父ちゃん母ちゃん、年取ったらこのお椀で かせんだ」
って。そうして作ってたって。ほんでもんで、かんげえなをしたんだっぺ。

「俺も親にこういうのでかsettっていたから、おらも年取っ

たら（こんな汚い茶碗で）かせられる。これは悪いことだ」
って。ほんで今度、いい茶碗でうんと食べられるだけ、食べらせるって。

かえる女房

（堂小屋）

ざつと昔だが、なるべく食べ物食べねえよ、仕事みっちりする嫁様ほしいという（男がいた）。すると、あるつつうわけよ。仕事はしながら、まんまはひとつも食べねえという。それもう、嫁様にほしいとなって、そいでもらうてきたのは、たいした立派な体格の嫁様なんだが、なるほど、まんま食べねえ。そいで喜んでいたが、嫁様だって生きとんだから、何かしらかねでは（食べないでは）いらんめえと思つて、おやんつあまは山さ行ったふりして、戻つてきて障子さ穴あけて見てたわけだ。

ところが、あにはからんや、食べないどころか、ぼた餅つくつて、それをこう、食うよりも飲むが早い。ポンポンいやとても五升めしいっぺんに食うわけだ。いや驚いちやうた。かねなんてとんでもねえ、何もかねでは生きてらんねえと思つたら（こういうわけか）。

それからそれを正体を見やぶるために、田舎の田んぼ道さ連れてった所が、大変な蛙が鳴きさわぐ。そしたらその嫁様が、素っ裸になって田んぼさ飛びこんじゃった。

だからもともと蛙が化けて来たんだな。仲間んとこに帰ったわけだ。

猿のむこ入り

（堂小屋）

じいさんが栗の草取りをしていたんだ。非常に暑くて、じいちゃんはあるなだれそうだが、（栗が）草にまかれれ

ば秋になって栗がとれない。どうにもこうにもこの草をと
つちまわねば(と思っていた)。

そしたところ、向こうに猿が見ててよ、

「じっちゃん、俺手伝うか」

ちゅうわけだ。

「手伝ってもらうのはいいが、何かあげなんめ(あげなく
てはならないね)」

「いや何もいらぬ。金もお米もいらねえから娘一人くれよ」

じいちゃんは、娘二人あるんだ。妹と姉様と、さ。じさ

まも苦しんだなあ。この草とるのは、容易なわけでねえ。

ほんだけども、おんつあまに娘くれるつつうことも容易な

ことではねえわけだな。第一「くれっから」と言ったとこ

ろで、娘が「いやだ」となれば猿にうそをこくわけだ。ま

あとにかく草はとってもらいてえわけだ。うそはつかねえ

だけど。

「ならば、一応それは娘に聞いてみっから、姉と妹に。そ
んで草とらねか」

と。

「よし、そんだったらとっへ」

となつて、いや猿は木から落ちてきて草とるわけだ。じい
ちゃん喜んじやった。くれる、くれねえはともかく、先に
草とつてもれえてえから。

ところが猿だつてさるもの、そんなにはかにさつちらん
ねえから、

「どうした、ぢっち(じいさん)、これだけ立派に取つた
んだから、娘のほうの話は」

「いや娘の話は、娘に伺つてまだみねえから、伺つてみて
すべえ」

それはお猿のおんつあまも、

「理の当然だから、では聞いてみてくれる」
と。

まず第一に姉のほうから聞いたわけだ。

「いや、今日は暑くて暑くてはあ、この草むしりあますべ
と思つてたのが、山のおんつあまが手伝うから娘くれると

こう(言ってきたんだ)。そんなじゃまあ俺も苦しまぎれに約束してきた」

「じつちやさん、何て約束した」

「じゃあ姉さんの方でもいいから聞いてくれろ、二人あんだから」

と。

「どうしたおんつあまんとこ、お嫁さんに行くか」

と、こう聞いたわけだ。

「このばかあおんつあんとこなんか行くばかあんめえ。そんなこと言って、おらはやだ」

「んだらば 困ったなあ。そうくんだと思った。仕方ねえから妹に聞いてみつか。俺もほとほと困ったな。また妹も行がねえとなったら、なんとおんつあまに言い訳したらいか、元のようにいがねえだから、草とちやたから、約束は約束だ」

じゃ、嫁はどうしたったら、妹はしばらく考えてたつけ。

「じつちやさんがそんなに困んなら、俺行くべ」

とこうなった。いや、じいちゃんの喜んだこと。

「いや、そんなじゃ俺助かった。栗の草もとのけたし、おめにいってもらえんだから何よりだ。ならばいってくれつか」

「いぐ」

となった。妹は、なかなか計略があるわけだかな。それはまだ(出てこないが)。ほんで、お嫁支度といったって、別にもねえが、まあいってくれんなら欲しいものは何でもくれべえ、というわけで嫁入り支度をして おんつあまの家さくれてやったわけだ。

ところが、だんだん桜咲くころになってきて節句の頃、「節句にもなってきたし、日が良くなってきたから、じいちゃんの所に餅をいってもってぐべ」

と、二人で餅をついた。ところが、

「うちのじいちゃんは、なかなかやかましくて、いれものを嫌うだ。重箱さいれば重箱臭いって言うし、風呂敷さ包めば風呂敷臭いって言うし、どうにも面倒くせいじさま

だから、臼うすごっしや（臼うすごと）持ってけばとても喜ぶだ」
ちゆうわけだ。ここに妹さんには計画があるんだ。そうしてまず臼をしよわせて、臼うすごと持ってゆくわけだ。

ところが、谷あいさ来たところが、その急な谷間さ、こ
う桜のみごとな花が満開なんだ。ほんで、

「ああ、いい花だなあ、あの花一枝折ってじいちゃんこ
さ持っていきてえ」

そしたら、おんつあまは、

「んだからわけねえ、臼を降ろして木登りは得手だから」
ちよつとやったところが、嫁さまは、

「そうはいがねえ、臼降ろせば土臭くなっちゃう。臼しよ
ってじゃなけりやだめだ」

これも仕方ねえ、どっこいしよ、と臼をからだにぎっち
り結びつけて登ったんだ。そんで嫁さまは、

「もつと先の方をとつてくれ」

と言うんで、おんつあまはどんどん先へ行ったよ。そした
らほれ、臼が重いから枝が折れて谷底へ落ちちやったんだ。

そいでおんつあまはみつちやた。これよかった。まんず家
さ戻られて、その嫁さまは帰って行った。じさまは、

「いやーそだらよかった、俺は何分なにぶんにも寝ても眠らんか
ったと、おんつあまにくつちやのが（くれたのが）」
と言ったと。

猿のむこ入り

（平沢）

娘三人もつてるじいさんが、山畑さ行ったら、一面の草
になつてるので、

「あーつ、この草とつてくれる人があんだらなあ、三人娘
のうちどれでも一人くれんだが」

つて言つたつて。そしたら、猿が出てきて、

「んだら、おれとつてくれっから」

つて、すっかりとつてもらつた。くれるつたつたけども、

猿にまさか娘くれてもやるめえと。そうして病氣んなつち
まった。そしたら娘が来て、

「おとさん、何かお湯かお茶飲まねか」
って。

「何も飲まねえ。おまえ猿の家さ嫁にいつてくれねえか」
って。

「人間に猿の家さ嫁にいつてらんねえから、そんなことは
いやでおわす」

逃げやいった。二番目の娘もそれ逃げていっちゃった。三
番目の娘は、

「おとつあんの病氣してるのなおらんなら、俺はどこ
さでも行くから」

そして、猿の家さ嫁に行ったんだ。そで、嫁に行つてか
らそいつを殺すべと思つてな、猿を。

そして、夜、寝るとき、金ぶちつて櫃びつ（ひつ||長持ち）
があるんだが、

「今夜は寒いから、金ぶちさ入つて寝らしえ」

って。（猿は）金ぶちさ入つて寝てたんだ。そして、お湯か
けて殺しちゃったんだ。そして、上から穴あけて、そして
その猿はとても金持ちの猿で、そうしてその金をみんな持
つてつて、そして裕福に暮らしたつていうことだ。

蛇のむこ入り

（沢）

昔、ほの、おじいさん一人で、娘三人もつてらんだつて
ね。そうしたらば、そのおじいさんは、タマリ（田んぼを
見回ること）に行ったんだと。そうしたところが、あの一、
おじいさんは、蛇がその、蛙をくわえてただと（くわえて
いるのを見たんだと）。そうしたらば、そのおじいさんが、
「蛇、蛇、その蛙をはなしてくれろ。おれ娘三人あつから、
一人くれつから」

つていうことを言つたんだと。そうしたら、約束してはあ、

蛇のかかになる人あんめよなあ。

そうして病気にしちまうだと。うして、姉妹三人して（心配して）一番大き姉様が、来たんだって。

「じいさま、じいさま、いかがでございます。まんまきお湯でもかけて食べてみなんせ」

って来たんだって。そうしたらば、あの、

「俺は寝ることも、食うこともねえ。蛇の御方になってく
んねえか」

って申し込んだんだって。

「この隠居、蛇の御方おかたになっていられっか」

ってけとばして行ったんだと。この姉ちゃんがな。そうしたらば、二番目の姉ちゃんがやっぱり来たんだと。そうしたら、また、

「蛇の御方になっていられっか」

って、二番目の姉ちゃんにもけとばされたんだと。そうしたら、三番目の娘が利口にできていて、

「俺が、その蛇のおかかになる。俺が蛇のおかかになれば、

おじいさんの病気は治るか」

って。

「治る」

って。そうして、（御方に）なるって約束したもんだから、じさま良くなっただと。そうして、今度、

「何ほしい。ほしい物買ってくれっから」
って。ふうと、

「針千本と長持ちひとつ」

って言ったな。そうして蛇がぞろぞろ、ぞろぞろ、お祝いのとき、来たんだと。そうして（末娘が）行って、

「ここさへえられっか（入れるか）」
って（蛇が聞くから）、

「俺はなんぼでもへえられっかけども、この長持ち先に入れてくれる」

ってなったちゆうから、ほれ、あの蛇のやつ綱くつつけて引張ったんだと。

「これさえ入れば姉こも入る、よーいとき」

と引張ったんだと。そうすつと、ガポーンとういちまん（浮いてしまうん）だと。ほれ、空っぽだから。水でもへえ（入れ）ば沈むかもしれねえが。疲れて（蛇は）死んじまったと。

そうして、あとさ 針千本めえて（蒔いて）、うちさ帰って来たんだと。だから、利口なものにはかなわねえわな。

蛙かわずと猿の競争

（堂小屋）

蛙と猿だが、共同して田を作ったんだ。そして、秋になって、実入りになって、とれたのがモチ米だな。共同で作ったんだから、共同でモチをついて、それを今度はついでみれば、猿はひとりじめしたくなつたんだな。

「どうだ蛙殿かわず、このモチを臼うすと高い山さあげて、そで、そつから転がして、そして早く拾った奴が我がものにすべ

え」

と。猿、利口なのにくばらっちゃって（だまされてしまった）蛙は、

「よかつへ」

と。それで二人でやつとこさと、臼とモチとあげて、高い山から転がした。猿は高い山から転がせば、一直線にモチと臼は転ぶだろう。蛙はピヨツコン、ピヨツコン行つたつて、ピヨツコン、ピヨツコン行つたくらいでは、俺にはかなうめえから、これはもうハア俺のもんだ（と思つていた）。

さあ、一、二、三で転ばした。と、こう、臼がゴロゴロ、モチが入ったまんま転んでいったわけだ。転んでいったが、臼は勢いづいて、今度は木でも何でも倒してまでもコロコロコロコロいっちゃったわけだ。

さあ、おっかけろとなつて、早く行つておさえたものが、そのモチは全部そのものになる。蛙は閉口したなあ、こいつには。多分、お猿にとられちゃつたろう（と思いつつ）後からピヨンコン、ピヨンコン行つたが、何だか途中でモチ

だけ残って白さねえんだ。(だから) 白だけ目当てにかけ
て行った猿がまいったわけだ。白ん中に何にもない。さあ
困った。それでは途中さつかかったか、と猿は息せきき
つて上がってくるわけだ。

そのうちに蛙殿は、モチとつつかまえてるわけだ。そで、
猿はだれでも拾った奴のものになるって、約束がそうなん
だから、とらいちやったわけだよ、蛙に。そいで、

「蛙殿、こつちの方から食ったらよかつぺ。」
などと言ったが、

「どつから食おうと俺の勝手」
と、蛙にまんまと食われちゃったんだ。

馬鹿むこの見合い

(沢)

馬鹿むこにお嫁さん世話してもらうのに、縁えんのしたの下さ、ふ

しあつぺ、板さ。それさ(そこを通して) ちんぽこさ糸付
けておいただつて。

そして、(縁の下では糸の先に) 鯉かつおぶし節くつつけておいで、
そうして話に寄って、ちやかつと引張ったら、

「さようでございませつてゆえ」

つて、おせらつたんだと。そうしたら(馬鹿むこは) ござ
んさま(ご指南様) と言つてしゃべくつてたんだつぺ。

下で引く しく人は違つてたんだつぺ。

そうしたらば、いろいろ嫁の縁談から何から語つていた
ところが、そうしたところが、下の人が便所さいきたくて
(縁の下から) 出ちまつたんだと。そうしたら、鯉節だか
ら、たまんめえ、猫が来て、ちやかちやかちやか
ちやか、つついたもんだから、あいさつが、

「さようです、さようです」

つて馬鹿むこが言うわけなんだと、ちやかちやかち
つかれるから、

「さようです、さようです」

あるところに馬鹿むこがあつて、そうしてお正月にいくんだつて。そうして嫁さんにおせらつたんだと。

「わたしのうちさ行くちと、えれえ刀を見せられるから、これは良い刀でござる。菊一(伊勢菊一)がもん金^{かね}近^{ちか}ちゆうでもござろうつてゆつてほめてくれる」
つて、嫁さんにおせらつたんだつて。

「そうしたらば、今度は皿を見せられつから、皿を見せらつたときには、これは良い皿でござる、備前焼ちゆうでもござろうつてゆえ」

つて、かかあにおせらつたんだつて。

(馬鹿むこは、嫁さんの家でうまく教わつた通りにやつたが) そうしたら今度、おばあさんにはあいさつおせなかつたんだつて。そうして昔のおばあさんは、

「いや初めてお目にかかります。お達者でようございます。お変わりありませんか」

つて、むこさんに言うんだと。そうしたら、(馬鹿むこは)だまあーつてこうしていたつちが、(おばあさんの)耳引張つて、

「これも備前焼か」
つて引張つたんだつて。こうして大馬鹿むこになつたつて。

馬鹿むことたくあん

(^{ぜみ}瀬^{がみ}耳^{がみ}上)

むこ様、馬鹿むこだけんど、もらつてみたらば、たいして馬鹿でもねえようだと思つて。ほれ、いろいろ何か教えたりなんかしてたつけども、嫁さんもらつて、嫁さんのうち、しゅうとさんのうちに、正月だかに、みつみといつて、昔、結婚式のあしたのあしたの日、かかのうちさみんなで泊まりに行つたから。そうして、

「そこさ行つたらば、その家にはたいした^(掛)軸^軸があつ

から、その軸をほめなさい」

と親たちに言われて、ほいで、行って、この床の間見たら、たいした軸がさがっているもんだから、

「いやいや、この軸はたいしたもんだ」

とほめたら、そしたらば、

「あら、この馬鹿むこだなと聞いておったけど、この軸ほめんだから、こりゃたいした馬鹿でもねえ」

と思つて。嫁さんの親たちは反省してたと。

そしたら今度、御飯食べたあとに、ほのお湯出されたら、たくあんつけをこの、一つ入れて、ぐるっと回し（なさいと言われていた）。そうしたらば、この、風呂さ入っただと。

そして熱いもんだから、たくあんつけをお風呂の中に入れて、かんまして、そして、この、お湯飲んだんだって。

そうして、まだあんだ。馬を出されたらば、たいした馬だどほめろつて教えられていたつけつど、馬の尻の方にいったらば、この馬の尻の穴あいてつとこ見て、何つてったつけなあ、それが忘れちゃったもんなあ。遠めがねではね

えし、ほら穴ではねえし、何かそれをほめたもんだから、へんなになつて・・・

そうして、この、しゅうと様に、

「いやいや、これはほんとの馬鹿むこだ」

つて驚いたつたつて。

お尻のこと、何ていったつけ、忘れちまつたもんなあ。

何か、この、軸ほめるのとたくあんつけをぐるっとお湯さ入れてかんまして飲めば冷たくなつから飲めと、これと、馬を出されたとき、ほめると三つこの教えられていたつて。嫁さまのうちに（行くときは）それで一つだけうまくいったのか、軸は。

それで、お風呂のお湯かんまして、たくあんつけて飲んだつて、これは失敗したし、馬のお尻は何て言ったか忘れちゃったもんなあ。

五十五ゝ六年前だもんなあ、聞いたの、十歳くらいのこときだから・・・

馬鹿むこと頭巾

(平沢)

何を教えても一つだけ覚えるが、あとは何も覚えねえ。それがむこになったんだ。そしてところが、何にも覚えねえんだって。んだけども、むこもらった人は、何とかしていいむこにしてえと思つて、いろいろたずねてみたんだつて。

「隠居(所)を建てたんだが、おめえ、どんな隠居を建てたらよかつぱ」

つうのをむこに聞いたつて。そんだけども、わかんねえんだな。そしたら奥さんがそばにいて、

「九尺二間つていえ」

つてそばで教えたんだ。そこで、九尺二間とは覚えたんで、

「どのくらいの家建てたらいいか」

つて聞くんで、

「九尺二間くらいがいいんではあんめえか」

つて答えたんで、

「これは馬鹿どこではねえ、とても利口なむこだ」

(ということになった)。そしたら、おつかさまが赤ん坊だいて来たんだ。

「この赤ん坊に頭巾こせてかぶせんだが、どのくらいでいいもんだかな」

つて。(すると)、

「そうだなあ、頭巾は九尺二間・・・」

それで馬鹿がばれちまたんだと。

馬鹿むこと菜っ葉

(沢)

むこ様いつてな、やっぱり。えー漬け物ですな。あのー、ごちそうになったらば、うまい漬け物だったつて。

「あーうまい菜っ葉だから、うちさもつて帰つて、かかあさも食わせつぱ」

って持って帰って来たちゅうたな。うん、馬鹿むこはよ。
そうしたら（家に帰ったら）かかあが寝てて、

「ブー（水）飲んでえ。フサシネエ（贅沢あるいは生意気な程度の意味だと思われる）かかあだぞ」

って、水もってきてかけたって。そうして、

「おみやげにもらってきた菜っ葉だから食ってみろ、うまいから」

って言ったたら、（かかあは）スーッて屁たれたってな。

「なにースケ（すっかい）、スケならおれ食っちまう」

って言ったって。そういうお話。

馬鹿むこと団子

（久保）

（馬鹿むこが）親戚さ行っただって。そしたらモチ好き
なむこ様なんだてな。

「おめえはモチ好きだから（でも）モチは今ついてらんね
えがら、団子作ってかせっから」

って、（その家の人は）こんなふうに言って団子作って、そ
っでごっつおになったって。（馬鹿むこは）、

「こりやあうまいもんだから、うちさいってもかかあに作
らせっへ。」

と思って、ほして、

「（これは）なんていう名前だ」

って言ったたら、

「団子」

って言っただって。

ほうして、忘れねえように、

「団子、団子、団子、・・・」

って（言いながら）来ただって。そしたら堀があっただっ
て。

「どっこいしょ」

ってのっこしただって。そしたら今度、

「どっこい、どっこい、どっこい……」

馬鹿むこと団子

(沢)

って。そして家さ来て、戸お開けて、

「かかあ、かかあ、うんとうまいものごっつおになった」

「なんていうもんだ」

「どっこい、っていうもんだ、どっこいこせろ」

「どっこいってわかんねえ」

「わかんねえことあつか」

(馬鹿むこは) ゴキんと (嫁さんの) 頭はてたんだって。

そうしたら、

「あ、いててて」

となつて、ここう、こぶができたんだって。

「こりゃあ、痛い、痛い。団子のようなこぶできた」

って (嫁さんが) ゆっただって。

「ああ、そのこった」

って。

(馬鹿むこが) 家内の家さ泊まりさ行っただと。そうして、団子こせえて食べらせらったんだと。そうして、

「うまい、うまい」

と思つて、うんと食べたんだつちけつども、

「こんど、うちさいって、かかあにこせえてもらおう」

と思つて、そうして、

「団子、団子、団子、団子、団子、団子……」

って、(うちまで) どれくれえあつたか、昔は乗り物さなんと乗らねえから、くどいて来たんだと。そうして堀っこ、

「どっこいしょ」

ってのっこしたんだと。そうしたら今度、

「どっこい、どっこい……」

できたんだと。そうして、

「かかあ。かかあ、どっこいこせえてかせろ」

「どっこいじゃあ、知らねえ、そういうのは知らねえ」

って母ちゃんにいわったんだと。

「知らねえことあんめえ。につきさげて、こきえて、ごごつおになってきた」

って。そうしてわりきもって、かかあんことひっばてえたんだって。

「おお、いて、このヤツ。団子のようなごぶできた」

って（かかあは言った）。

「ええい、その団子のこった」

って（馬鹿むこは）ゆっただって。

馬鹿むこと団子

（堂小屋）

（あるとき）隣部落さ行って、そのおやんつあんは、団子ごごつおになったんだと。そいで、

「こんなうまいもの、とにかくまあ、我が家さ行ったら作

らせべえ」

（と思った）。そして団子ということ聞いたのが、いまだかつて食ったことなかったが、うまいもんだ。そこで、ほれ、まず家さ行くの道がちよつと遠いから、行くうちに忘れつと大変だから、

「団子、団子、団子、団子・・・」

とやってたわけだ。（言いながら歩いて来た）。

「団子、団子」やっていくうちに、橋あつとこ、

「どっこい」

と乗っ越えた（乗り越えた）わけだ。ところが、団子っていうこと、そこまでやって来たはいいが、今度はいつのまにか、「どっこい」になっちゃったわけだ。

「どっこい、どっこい・・・」

やっていって、そいで忘れないうちに、

「かかあ、いあたか」

とたいそう息巻いてきたが、

「こういううまいものをごごつおになってきたが、あれ

作ってみろ」

と。(かかは)

「それなんだ、あれだの、これだの」

「それは、どっこいちゅうもんだ。どっこい作ってみろ」

「そんなものは聞いたこともねえし、見たこともねえ、どっこいつあ、どんなものだ」

「どんなもの、こんなものねえ、どっこいはとてもうまいものだ」

それで、かかあは、わかんねえから、ほれ、

「そんなわけのわからねえ、どっこいも知やねえかかああるか」

つて、^(腰りつけた)こんきづけたつつうから。ここき、このくらいのこぶできたわけだ。それで、

「おやじ、団子のようなこぶできた」

(とかかが言うつと)、

「そだ、その団子こしらえろ」

と言ったそだ。

馬鹿むこと団子

(平沢)

嫁の実家さ泊まりさ行って、団子をこせてかせらっちゃつて(食べさせてもらつて)、それがおいしかったんだねえ、よっぽど。

「何ていうんだつしや、これは」

「団子つていうもんだ」

つて教えられて、

「団子、団子、団子・・・」

つて言つてきて、どこまでも忘れずにきたらば、堀があつただ。その堀を乗っ越えるのに、

「どっこいしよ」

と乗っ越えた。それから「どっこいしよ」と覚えるようになった。

「どっこいしよ、どっこいしよ」

と覚えてきた。そして家行つて、

「どっこいしよをこせてかせろ(作つて食べさせろ)」

「さ、どっこいしょなんて、そんななんじょうなもの（どんなもの）だつぱ」

「どっこいしょ わかんねえって、どっこいしょこせてかせられてきたんだから、おめもどっこいしょこせえろ」

「わかんねえ」

「そんなことあるかっ」

って、かかをくらせらっちゃった（殴りつけた）。

そいで、

「団子のようなこぶできた」

「ああ、その団子だ」

って、思い出したと。

馬鹿むこと団子

（宇津川）

あのー、むこ様に行ったんだって。そうしたらば、あの

ー団子こさえて食べさせられたんだって。それがうんとうまかったんだと。そうしてほら、うちさ今度、泊まりにいく（家に向いた先から帰る）のに、

「団子、団子、団子・・・」

って言ったんだって。それが、その団子が、今度、堀っこのっこいたら（飛び越えたら）、

「どっこいしょ」

ってのっこいたんだって。そうして、どっこいしょってのっこいたら、今度は、

「どっこい、どっこい・・・」

となっちまったんだって、団子が。そうして、家さ行って、

「どっこい こせえろ」

となったんだと。

「どっこいちゃ（どっこいとは）どんな物だ」

ちゆうたら、

「どっこいこせえろ、どっこいこせえろ」

って、しよねえんだって。そうして、嫁様の頭はたいたん

だど。そうしたら、ここき（頭に）大きなこぶができたんだと。

「団子のようなこぶできたわ」

って言ったたら、

「ああ、その団子のこつちや」

って言ったんだって

馬鹿むこと団子

（瀬耳上）

昔あったと。南山の馬鹿むこが。そして嫁さんのうちに呼ばれて行ったのかな。そしたら、その、団子を作ってごちそうしてもらっただつて。そうして、その団子がうまいもんだから、うちに帰って、

「かか、かか、うまい団子を、その、ごちそうになつてきたから、作ってくれ」

と言おうと思つて、帰りながら（それを）忘れねしようと思つて、

「団子、団子」

と言いながら来ただつて。そしたら今度、堀があつて、

「どっこい、どっこい」

と来たらば、

「どっこい、どっこい」

になつちやつて、ほいでうちに来て、

「かか、かか、どっこい、どっこい作れ」

と。（かかが）、

「どっこいって何だへ」

と言つたら、

「何でもいいから、どっこい作れ」

「どっこい、なんていうのわかんねえわ」

そうして、

「あんだ、困つちやつた」

なんて言つて、かかあに。（かかあは）はたかれたのかな、

ほうきかなんかで。したら、その、こぶができただつて。

「団子のようなこぶできた」

なんてったら、

「その団子のことだ」

って、これ言った。それが南山の馬鹿むこの話な。

南山っていうのは、会津の方でねえの。

馬鹿むこの山賊退治

(関場せきば)

馬鹿むこが、ごしよだけの方さ、泊まりさ行ったらば、そのうちの土蔵に寝せられたつて。土蔵さ寝るつて、こんなところに・・・と(馬鹿むこは)思つてたらば、その土蔵のところ弓があつたつてな。弓と矢があつたつて。で、

「これ、たいしたやつだな。これ引いてみつか」

つて。そうして、いたずらがたらに引いて、これピュッと離したら、その矢が飛んでつたら、隣の蔵つこ中に泥棒が入つていて、その泥棒の親方のけつき当たつちやつて、泥棒が死んでしまった。ほうだ、

「これたいしたむこさんが来たもんだ」

つて、てがらになつて、

「そんなに弓の名人ならたいしたもんだ」

つて。それが殿様の耳にはいつて、そして今度、その殿様が、

「どつかの山にたいした賊がいる。その賊を退治してもらいてえ」

つていうような願いが出て、馬鹿むこは、頼まれただつけども、どうして退治していいかわかんなかった。

ところが、そのかかあは、馬鹿むこがいなくなつてほしくてしかたなかったわけだ。そうしたら、

「おめえ、殿様に頼まれたんだから、あそこさ行つて、退治してこ」

と言われることで、そつで、

「弁当しよつてもつてけ」

と。それで今度、むすびをえーっぺ作ってもらった。ところが、そのかかあは、なるたけ馬鹿むこを殺してえから、毒をいれてにぎつただと。

そうして今度、(馬鹿むこは)山さ行って見たらば、おっかなくていらなくなつちやつたの。それで、この野郎は、はあ、弓矢もそれから弁当もみんな山さぶち投げて、そうしてにげて来ただと。ほうだら、ちようど賊が来て、そのむすびを、

「こらいいものあつた」

って、みいんな食つちやつたら、毒へえってんで、みんな死んじやつて。そうしたら、この馬鹿むこは、持っていった矢を全部賊に突つたして、そして帰つてきたつて。

そつたら、みんな、これ、弓矢でやつたと思つちやつたわけだ。毒食つて死んだとは思わなかつたわけで、そうしたいしたむこ様になつたつちゆう話

運のよいむこ

(堂小屋)

なんとかして、しゆうと様さ行くんだけど、何か持つて行かねばならんねえんだな。手土産のようなもの、お正月だからな。その、橋を渡つていくうちに、うさぎが飛び出したんだな。そのうさぎは、ちようどむこ様が行つたらば、川岸から飛び上がんだけんども、下さ落ちれば川、上さあがんには急な土手、という具合。そのうさぎをおさえるべと思つたら、うさぎは一生懸命土手をかいたつつうんだな。そしたら、土手こうほじくつてるうちに、山芋掘り起こしたんだな。

「これはたいしたもんだ。うさぎに山芋掘つてもらつて、これは、しゆうと様は好きはずだ」

と、うさぎと山芋と、ふたつ出来たわけだな、土産が。そして、何にもなかつたのに、それだけのものを持つていった。(向こうへ着くと)、

「やあやあ、無事で帰つてきた。今夜はゆつくり泊まつ

たらよかつへ。」

(などともてなされ)、芋とうさぎを出して泊まったわけだ。泊まった所が、大変に暮らしのいい家なので、床の間に弓がかかっているわけだな。

「これは一体、どういうふうにして絞(ひき絞る)るものかな」

こうやって、ちゃつとやったんでは、力がなくてだめだが、両方の足を踏ん張って弓をこう引いていると、満身の力を込めて、こう引張っているうちに、手すべったわけだ。そうすつと、その矢が、天井板突き抜けて、屋根抜けて、ずいぶん力のである弓だとみえて、どこかさ飛んでっちゃったわけだ。

さあ、これ、とんでもねえいたずらして、これは明日は、弓はあっても矢はどこさ行ったんだ、(とたずねられて)矢は、いつちまったともいやんねえから(言えないから)。ま、ず知らんぷりして元のところさ置いて寝た所が、下男が起きて(見ていたのだろう)。

ところが、その月夜の晩、その家の上を雁が飛んでいた

んだな。それで、さっきの矢が(そのうちの)一羽に刺さっちゃた。その雁、落ちちゃった。それがその家の脇さ落ちて、下男が朝起きてみたら、たいした雁が落ちてたと。

「これは、だれが討っただ」

と(しゅうとがたずねると、下男は)、

「それは、ゆうべ泊まったむこさんが、やったんだ」

仕方なく、

「俺がやったんだ」

と言うと、するとむこさんは、弓の名人にしらっちゃった。(仕立て上げられてしまった)。そいで、ま、明日は帰ってくつべと思っていたが、この雁を祝って、

「ごちそうすつから、今晚泊まれ」

「そうだあ、一晚、じゃあ世話になっか」

と(泊まった)。

その晩には、たいしたその料理。それはとてもうまいごつおでもって、大変なごつおになったわけだ。ごつおは、よかつぺけんども、今度はあんまり食い過ぎて、下

痢しちゃったわけだ、むこ様が。(そして粗相をしてしまい)、
そいつを始末して、戸袋の底さ隠しておいたわけだ。明日、
人の起きねえうちになげべ(捨てよう)と思って。

ところが、その明日になつと、何かあるつちゆうわけだ。
ところが、その家の下男は、あいつだつてまちがつてぶつ
た(矢をうった)のに、ただむこ様に手柄たてらつちやの
で(たてられてしまったので)、

「今度は俺だ。そいつこそは俺だ」

と言つた。それで、むこさんは、大変に助かつたわけだ。
自分が不始末をしたけれども、下男が「俺だ」と名乗り出
たから助かつたんだ。そこでむこ様は、大変に褒めらつて
帰つたと。

狸たぬきの仕返し

(堂小屋)

漁師が狸を生け捕りにしてきたんだ。そしてまあ、狸汁
やっぺと四つ足縛つてつるしてたわけだ。ところが、今日
も狩りに行くつからとおやんつあまが出發けて行つた。
そのあとで、婆さまは節句も来つから粉をついていた。狸
はこうして見てたつけ。

「ばあちゃん、俺、手伝うから縄とけ」

ちゆうわけだ。まんまと婆さまバカにしゃつちや(化かさ
れてしまった)わけだ。

「んだら、とくべな」

と、綱といて降ろしたところ、(粉を)つくんだつちやけん
ども、その狸のやつちやも、粉をこぼすんだと。婆さまは、
いたましから(もつたいないので)しゃあんだと(しゃが
んで拾つた)。それが、わざと(こぼすんだと)。婆さま、
一生懸命まじめこごまつて(拾っている)間違つたふりして、
その杵きねで頭かぶついちやつたから、まいつちやつた婆さま。そで、

婆さまを殺して、そして今度よおって（料理して）そして
婆汁^{ははじゆ}作ってたんだ。じ様、晩になって来たっけが、

「じ様、狸汁作ってた」

って。そんなときは、婆さまに化けてんだかな。それで、

「うまい、うまい、狸汁はうまいなあ」

そいでまあ、よっぱら（たくさん）食わせてから、今度

そのばあちゃんが、

「じい、じいめ、ばあ食った。おかまん棚、見ろ見ろ」

「何だそのばあ食ったってえのは」

（と、じいは言ったが）殺した婆さまの肉、煮て じ様にか
せて（食べさせて）その狸殿は逃げて行くわけだ。

おかまん棚、見ろ見ろっていうのは、何かおかまん棚さ
婆さまのものを上げてたんだな。ほんでほれ、じいはばあ
食った、おかまん棚見ろ見ろちゅうのは、俺のこと殺すつ
ぺと思つたじい様は、とんでもねえと。おめえの最愛の婆
さまを殺したのは俺だ、ちゅうわけだ。仇をとつたちゅう
わけだ。

そんでなくは、ほれその晩げは狸汁にしろいちまうわけ
だから（されてしまうわけだから）。婆汁を食わせたつちゅ
うわけで（じい様に）仕返しをしたということだ。

おならの身代わり

（平沢）

おなら出てなんともしよなくて、人の前さ出て外聞悪く
てほかさ出らんねえんだって。女中を連れて歩くんだって。
そして、

「嫁の実家さ行がなんねえから今日は。んだから、おまえ
付いて歩けて。俺は、こごまっと屁が出んだから、屁が
ひとつ出たら、おまえに着物ひとつ買ってくれっから、そ
んで俺、ブツとしたらば『粗相しました』ってあやまれ」
って教えてった。こごまっと屁が出んだって。今か今かと
思つて女中が待っていると、ブーツとしたので（女中は）、

「おっーつと裕あわせが一枚」

ときたもんだ。裕を買ってもらえると思っていたんで、

「ごめんなさい」

言うんでない、

「裕が一枚」

と（言ったので）、そしてバレちまったんだ。

屁ひり女房

（堂小屋）

ある男が嫁様もらったんだと。ところが、その嫁様は、もらってはみたものの、毎日青い顔をして心配そうに、その仕事も手につかないでいるべ。それで、

「どいか悪いのか」

と、姑あめばあさまが聞いたわけだ。

「どいこも悪くねえけど、私は大きなおならをしなけれ

ばいらんねえ」

と。

「どのくらい大きなおならなんだ。たいしたことあんめえからやってみろ」

「だら、姑ばあさんろんぶち（囲炉裏のこと）さつかまつてる。俺、これからやってみつから」

二回かためたのだから、これ相当なおならだなあ。

ばあさま、つかまつてらつせと（はじめたが）、最初はブブブーといったけが、あとはこの地ひびきして、その振動が地震のようだったな。いやいや、とてもはあ、ばあさまも青くなっちゃって、そのくらいにしてやめてくれと。

どこかに吹きつけられちゃう。（すると嫁さんは）、

「なんともハア、こういう因果なからだから、暇をください」

と。

「いや、俺もなんとかして置きたいと思ったが、ときどきそれやらつちちゃんでは（やられたらのは）、命にさわるか

ら・・・では、今日は送って行くから」

里さ送って行くわけだ、お嫁様をだな。そして、

「いたましい(もったいない)嫁様だが、からだはいいし。

ただ、その癖があるのがとてもじゃねえが、しょうあんめいから」

と。

送って行くのに(途中で)村人がたいへん集まって柿落

としをやっているんだと。とても竿でたたいたくらいでは、

落としきれないわけだ。ところが(嫁様は)、

「そんなにみんなして かかつことねえだに。おら、おな

らひとつ、落としちまう」

と。

「とんでもねえ、そつたことで落ちるもんでねえ。もし、

落ちるなら柿みんなくれてやる」

「そんなに疑うなら、やってみつか」

と、尻ひったくって、ばあさまは知ってから、

「やってみるか、落ちるか落ちねえか」

ブーツとやってるうちにドロドロドロと台風のよう

な響きがして、柿の実はひとつもなくなっちゃったと。約

束どおり、柿の実はもらったと。そしたら、姑ばあさまは、

欲が出てきたわけ。こんな儲かる嫁様は、追んださねえで

おこうと。こんだ、柿を全部まとめて、

「行かねでくれよ。おらやでは、何もすつことねから、そんで居てくれよ」

と。そんで、嫁様居るようになったんだと。

カカトはずし

(宇津川)

・・・(聴き取れず?)・・・ときはよ、これおならんかしたら、不調法でな、はあ恥ずかしい話だったから、お尻の穴お座りしたときに絶対よそ行ったときに、あのおなら出ねえようにカカトで、お尻の穴ところに押っつけといて、絶対その不調法してなんねえって。

そうして、まあそうしていうるちに、たまたまほれえ、おならが出ちやっただってよ。ということは、カカトがほれ、はずれちやっただって。

それでほれ、カカトはずしってことになったんだっていうような。

「カカトはずしだな」

なんて、女の人おならすつと、そんな話したことあつから。

桃太郎

(沢)

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんは、山に木いこりに行って、おばあさんは川に洗濯に行った。

そうしたらば、ほれ桃が流れてきて、そうして、(おばあさんは)桃を拾って、うちへ帰って来た。そうしたらば、おじいさんが来たらば、割って食べようとして、しまっておいたんだと。そうしたらば、おばあさんは、おじいさんが帰って来たから、桃を出して来て、包丁を当てたんだって。そうしたら、

「待つてください、待つてください」

って言うんだって。そうしたらば、中から桃太郎ってゆうのが割れて、出て来たんだって。麴こうじで作った甘酒を飲ませて育ったんだ。

そうして、大きくなって、桃太郎て付けたんだって。そうしたらば、

「私は 鬼が島に鬼退治に行くから、きび団子をこしらえてちょうだい」

って言うだと。日本一ってゆう旗をたてて行ったんだと。そうしたら、きび団子をこさえて、あてがったんだって。そうして、鬼が島さ行くわけ。そうしたらば、犬が来たんだって、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どっちさ行きますか」

「私は、鬼ヶ島に鬼退治に」

「腰さ付けたのは何ですか」

ってゆったら、

「これは、日本一のきび団子」

一つあげれば、

「私もお供します」

って、くつついて行ったんだと。そしたら、今度、猿が来たんだって。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どっちさ行きますか」

「私は、鬼が島に鬼退治に」

「腰さゆっつけたのは何ですか」

「これは、日本一のきび団子」

「ひとつ食いたい、お供します」

ってゆったんだとキジが。キンキンと飛んで来たから、やっぱり、

「鬼が島さ鬼退治に」

「腰さ付けたのは何ですか」

「これは、日本一のきび団子」

「ひとつ食いたい、お供します」

そうして、島さ行ったんだと。

赤鬼と青鬼と戦って、宝物をとって来たんだと。(荷車) 車さ積んでな。

花咲かじじい

(沢)

あるところに、おじいさんとおばあさんとありました。おばあさんは川に洗濯に行つて、おじいさんは、山に木いこりに行つたんですと。

そうすつと、木箱が流れて来たんだと。うちさどつて来て見たところが、かわいい犬コ、育てんのに今ならミルクだっぺけんども、ごはんを煮て食べらせて。

そうして今度、大きくなつたから今度、馬(飼ひ乗)の舟でごはん食べらせたつて。そうしたんば、馬みたいになつて、そうしておじいさんが木いこりさ行くのに、てん(ち)のちと

まさかりと付けらつしやいて、そうして私に荷鞍(にぐら)つけろつて言うんだつて、犬がな。大きくなつて。そうして(おじいさんと犬が)行つたところが、犬が、

「ここ掘れワン、ここ掘れワン」

つて鳴くだつて。ほうしたれば、一生懸命に、おじいさんが掘つたところが、ほれ、大判・小判が出たところなんだつ

て。そうして、うちさ来て、おばあさんと大喜びして。

そうしていたらば、した(し)ないのろくでねえおばあさんとおじいさんなんだな。草履(ぞうり)か田下駄(たげた)ぶつあげて、草履と下駄と履いて来たんだつて。そうしたら、来たところが、

「いや、こらこら、こつちでは、たいした小判から何から、どういふわけで儲けた」
つて、こつちいふわけ。

「おらの犬がな、おじいさんが木いこつてたら、ここ掘れワン、ここ掘れワン、つてゆつたから、そんで掘つたんだつて。そうしたらば、こつちいふ小判いっぺえ出た」
つて。

「そんだら、その犬かしてくれろ」

となつたんだつて。その犬、むりむりむかつたんだつてな。

そうしてほれ悪いおじいさんだから、泥水や何かで、とてもひどかつたんだと。そうして今度、犬を殺して、木のみで、木を(殺して埋めた上に)植えてきたんだつてな。そのおばあさんが、

「犬けえしてくれろ」

って言ったんだて。そうしたらば、そこ通って行ったんだつpeg、木が、ほれ犬の上き植えた木が、おつきくなつて、ここき鳥がとまつてて、

「この木い切つて、^(木すり白)するすこしらえろ」

って。そうして(するすを作つて)米をしいたところが、こんで、じいさまの方さは金だつて、ばあさまの方さは銭だつて。ざつこんびつこん、ざつこんびつこん、というふうに、金が出てしよんねえんだと。

そうしたら今度、悪いおじいさん来たんだと。ほうしたら、今度、悪いおじいさんは、(良いおじいさんから)、

「^(腹が立っていた?)こういうわけで、あんたに犬殺されたから、犬ころえつて、^(腹が立っていた?)ごうしよつばらやけてたけんども、鳥がとまつてて、この木切つてするすにしろつていうから、するすにして米をしいたらば、^(と説明すると)こういうふうに、お金から何がら出た」

「ほんじゃら、そのするす貸してくれろ」

つてゆうだと、また。そんだから、何ともしねえだから、貸してやったんだと。そうだから、やつぱり悪党の人だから、(大判・小判は)出なかつたんだつてな。いろいろ蛇のようなもんだの何か出てよ。

そうして今度、おじいさんは、^(せあてかまさ)ごせあてかまさするすぶつこわして、かまさ風呂炊きにしちゃた。そうして、今度、その(良い)おじいさんも、^(せそく)せそくに行つただつて。そうしたらば、

「何も出ねえから、俺の方さは何も出ねえ。くだくだほんにもう蛇のようなものから何から出て、泥のようなもの出て。(小判)も何も出ねえから(燃やしてしまった)」

「ほんだらば、その^(灰)アクくれてくれろ」
となつて、良いおじいさんはアクをもらつて、ざるひとつ。そして、もらつて、うちの枯れ木さ今度とまつた。そうしたら、殿様が通つたんだと。

「そこにいるじい、何してる」

「枯れ木さ 花咲かせるおじいさんだ」

って。ほうしたら、

「咲かせてみる」

となっただと、お殿様がな。

「ひとふりふったら、つぼんだー」

って、つぼみがふくれたんだと。ふたふりふったらひらいたって。みふりめには、散ったって。そして殿様にご褒美もらったと。いやたいーした宝物もらったんだと。

ほうしたらば、今度、そのおじいさんは言ったんだと。

「こんどやっぱり、こういうわけで、あんたの家からアクもらってきて、枯れ木さ花を咲かせたら、殿様に、こういうわけで花が咲いたもんだから、そんでご褒美もらったんだ」

って。

「たいーしたご褒美もらったんだ」

って。悪いおじいさんは、アクもってて、木さ、やっぱりとまってたんだって。そうしたらば、殿様がやって来て、

「そこにいるじいさんは、何のじいさんだ」

「枯れ木さ花咲かせるおじいさん」

「ひとふりふったら、つぼんだー」

つつたって、つぼまねえだ。悪いおじいさんはな。

「ひたふりふったら、ひらいた」

つつたって、ひらかねえ。そうして殿様の目さ、アクだから、目さへえって、そうして、牢屋さつながった。

かちかち山

(沢)

おじいさん 山さ行って、狸たぬきおさえて来たんだと。そうしたら、狸おさえて来て、生きてるやつ、吊るしておいたんだと。そうしたらおばあさんが、麦つきしてたんだと。どちーん、どちーんと、昔はほれ 臼でついたからな。こうやって、どちーん、どちーんと。そうしたら、その狸のゆうのには、

「おばあさん、俺んこと解け」

って。

「俺が麦ついで手伝うから」

そうして、

「解いたらば、じさまにおこられっから」

って(おばあさんは)ゆったけんども、解けってゆうだと。

そうして、

「おじいさんが来る頃は、俺んこと縛って吊るしておけ」

って。そうして(とうとう)ばかにしらって(しまつて)、

そのばあさんは、狸を解いてやった。自分でこぼしたのは

自分でしらうこと、こうなつたつちが、そうしておばあさ

んの方さ、ぎっくり、ぎっくりとこぼして、おばあさん、

むきになってしやつてたんだと。そこんどこ(たぬきは)

杵でくらつけて殺しちやつたんだと。

(そうしてたぬきは)はあ、おじいさん来る頃、ちゃんと

おばあさんの支度して、そうして、手拭いかぶつていただ

と。化けて。そうしたらば、そのおじいさんは、

「どうした、狸煮たか」

ゆつたらば、

「煮た」

って。姉手拭いにかぶつて、おばあさんのこと似てたの。

そのたぬきは。そうして、

「食べる」

って言つたんだつて。そうしたら(おじいさんは)、

「なんだか悪い悪くて食べらんねえ」

って。ばあさんのことだから食べねえだつて。そうしたら、

「なあんだか今夜の狸は、ばあ臭せえな」

どつて、そのおじいさんがゆつた^言た^ただ。そうしたらば、流

しの下さ(おばあさんの)骨を置いて、そうしてゆつて食

わせたんだと。ばあさまが大騒ぎしておじいさんは(おば

あさんのことを食べてしまったのに気づいて)悔しくて泣

いてたんだと。そこさ白うさがやつて来て、

「なんでおじいさん泣いてんだ」

ってゆつたらば、こういうわけで 狸にばかにしらつて、ば

あをかせらっちゃって、ほうして、今じいばかでばあ食ったって。流しの下の骨見ろって。狸は逃げたんだと。そこに泣いてたところを白うさぎが来て、

「そんだったら俺が仇^{かたき}とってくれっから、炒り豆一升こしらえてくれ」

って。炒り豆って、ほれみそ豆な。そうして行って、山さ行って、茅刈^{かや}りしてたんだって、そのうさぎが。そうしたらば、そこさ狸が行ったんだと。(そこでうさぎは)うまいものコリコリ、狸も食いたかるポリポリって一把刈^{いちわ}っては食い、一把刈^{いちわ}っては食いして、そのうさぎがいたんだと。

そうしたら、うさぎにじいさまは、仇^{かたき}とってもらおうわけだから、豆一升炒^{かや}ってやった。そうしたら、狸は食いたくて寄って来たんだって。そうして、(うさぎは)一把刈^{いちわ}ったらひと粒^{つぶ}だって、そういうふうにあてがって、茅刈^{かや}らせて、
そんで、

「狸しゅうは、茅をしょって、しょった上さ俺んことに乗せてゆけ」

ってゆうわけなんだ。そうして、ひとせしよった上さ、うさぎを乗せて来たと。

「ここはかちかち山だから早く〜」

って、うさぎが言うわけなんだ。ほれ、マッチつけんのに、かちかちってやったちが。そうしたら、ポーポーと今度燃えてきたっぺ。そうしたら、

「ここは、ぼうぼう山だから」

ってゆって(うさぎは)ピョンとのっこしてはあ跳ねていんだ。そうしたら、今度狸は、はあポロポロと焼けて、ひどい目にあつてんの。そうしたら、今度むかい山でうさぎが味噌^{みそ}すりしてんだと。そうしたら(たぬきは)、
「何さそれいいんだ」
ってゆったらば、

「やけどにいい」

って。そうして、味噌^{みそ}をやけどさつけたもんだから、やめてしよあんめえ。そうして、やめてひどかったっぺ。

そうして、今度堤^{つみ}のようなところさ行って、うさぎさん

は、自分は木舟なんだと。そうして、狸には土舟つちこさえてやって、木舟どっかーんとつつくんだと。そうしたら、こちでも土舟どっかーんとこれやったら、割れちまったんだと。そうして、その沼のようなとこさへ（はいって）えってやったもんだから、ぐつぐつぐつとほっつてへえちまったんだと。そうして、おじいさんに、ひ（遺体）たい持って来て、仇とって来たからってわけで、見せたって。

【注釈】 文中では、狸たぬきとムジナの言葉が混じり合っていましたので、ここでは、狸に統一しました。

千匹のネズミが京見物に行く話 (堂小屋)

田舎のネズミが京都を見物に出かける、という話だ。千匹で行くだから容易ではねえだが、山行くうちは良かった

けんども、大井川さ出つくわしたところが、ほれとてもじやねえが、ネズミなんか越えるわけでもねえ。川を泳いで向こうさあがるわけだ。

で、一匹、二匹勘定していけば、とてもこりや千匹やんなら十日ぐらいかかる。そこんところをねらうわけだな、話がねえから。

京都見物のネズミは、川さどんぶり入って浮きやがって尾ふりふり振ってキューキューと鳴く。その次、どんぶり入って浮きやがって、尾ふり振ってキューキュー。というふうにして最後はごまかすわけだ。

長い話

(久保)

高い空から、長い、長い長い長い ふんどしがな、落ちて来たって。ほうして、ずーっとしつぱ(引っ張ったら)たら、なんぼしつぱったって しつぱりきんねえ、長い話。

【みちくさ】川内村スケッチ

○ 一九八二年七月二十六日(月) 雨

調査初日。期待と不安の中、傘とテープレコーダーを持ってコミセン(コミュニティーセンター)を出発。

川内村というだけあって、いたるところに川が流れている。それから、たばこが多い。たばこには、花が咲いていた。ピンク色した小さな花だ。

「大きな葉っぱに似合わず、かわいい花だなあ」とささやかに感動する。

○ 七月二十七日(火) 雨

また雨だ。歩いて行くのは辛い、農家の人は、家にいてくれるので助かる。見ず知らずのミョウチキンな学生が突然訪れたというのに、村の人は皆温かい。上がつて炬燵に入れと言いい、お茶まで出してくださる。まったくありがたいことだ・・・

○ 七月二十八日(水) 曇り

川内村の畑を見ると、

「あ、やっぱりここは千葉よりも北なんだな」と思う。トマトもみんな真っ青だし、トウモロコシもまだ実が入っていないのだ。

ところで、川内村にスイカ畑はないのかしらん。三日間歩いているのに、まだ一度もお目にかかっていない。

ひそかに期待しているのだけれど。

○ 七月二十九日（木） 雨のち晴れ

田んぼの中の道を歩いていたら、トンボの大群に出会ってしまった。トンボの中を歩いた、という方が正確だろうか。右に左に、上にも下にもトンボが飛んでいる。まわり中、トンボだらけ。このトンボは千葉では見られないんじゃないかな。私はあんなトンボを見たのは初めてだ。

○ 七月三十日（金） 晴れ夕方に雷雨

五日間の調査も今日でおしまい。予想以上にたくさんのお話を聞かせていただけたし、村の人達はヨソモノの私たちにとても親切だった。

幸せな気分です、夜、コミセン（川内村コミュニティセンター）の近くの田んぼに、ホタルを見に行つた。いる、いる、ホタルがわんさかいる。稲の上をふわふわと飛び

交うだけでなく、高い木の枝にもいっぱいまとまっている。まるで真夏のクリスマスツリーだ。

明日は、大きな靴下の中に、民話をたくさん詰め込んで、千葉に帰ろう。

一つの話、一つ of 言葉も落とさないようにして。

むかし狩人する人の奥さんが、あの糸（糸紡ぎ）うみしてたんだって。ブン、ブン、ブン、ブンてあの着物織るのに。

そうしたところが、立派な姉様が手伝いさ来るんだってな。おつかさんが一人で、おっとさんはほれ泊まり山さ（狩りに）行ったんだっぺ。そうしたところが、立派な姉様が来て、麻（麻糸紡ぎ）うみ手伝うんだと。

二晩とか手伝ったもんだから、姉さんにほらこういう風に手伝ってもらっても、お礼の仕方ねえって、何したらいいもんだかって、ほれ手伝った姉様に言ったんだと。

「蒸かし（蒸か）ご飯が、お蒸かし一斗おれにお礼してくれろ」と言っただと。そいつを蒸かし蒸かして一斗だと。そんなだから、何程おつかねえと思ったかしれねえ。その姉（あね）ちゃん（奥さん）は。そうしたらば、あした（翌日）の晩に来たんだと、約束どおりに。そうしたら、

「そいつをおにぎりにしといてくれろ」

って。そうして、おにぎりにして、ほれハギリ（半切り）（飯切）の中さ入れておいたんだと。ほれ一斗のご飯だから大変だわな。そうしたら（髪の毛を立派に結って来て？）、

「姉いたか、姉いたか」
って、（立派な姉様が）来たんだと。そうしたら、その人（奥さん）は、梁の上さ上がって見てたんだと、おつかねえから。そうしたら、

「いねえのか。おれにお礼こさえてったな」
って言うだと。ほんにほれ、一斗のにぎり結んでおいて行っただと。

そうしたらば、あのおつかなくてその姉様（奥さん）は梁の上で見てたらば、髪立派に結って来たのサラツと解いじまって、頭の中にこういう（口の様な）穴があんだと。
そいで、ひとつつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いつんつ、むつつ、ななつ、やつつ、ここのつ、とう、とう食べなけりや、

「おお、うめえ」

と言わねえんだと。そうして、その一斗のご飯、ぺろりと食べて行っちゃったんだと。

それで、それからこれはおつかねくてしようがねだから、あしたの晩にはおやじはいねえだから、(どうして)なんしていいかわかんねえだから、風呂の中さ隠れてただと。そうしたらほれ、そのときから(当時)投げ櫛(くし)はするもんでねえって。投げ櫛ってこれは絶対(人が死んだとき以外は)しちやなんねえって言うだ。

そいつほれ、その姉様(奥さん)は、跳ね上がったから、櫛落ちただと。そうしてほれ、こいつは昔話だからそうなったんだっぺが、そうしたら、そのおばあさん(立派な姉様、化け物)は、

「なんだ、櫛(放り投げて)ほうって行っただな」

って、拾ってぶん投げて、

「姉(奥さん) いたかつ」

って投げただと。そうしたか、その櫛が口きいたんだと。

「風呂の中さいる」

って。そんでな、姉(奥さん) いたかつて、また聞くんだと。そうしたら、

「風呂ん中さいるっ」

と。ほいから、あの何ともしよがんめえ。そうしたら、その風呂を(化け物が)しよって、よっち、よっち、よっち、よってしよって持っていくんだと。そんで、いいあんべえの所までしよって来たところが、喉(のど)が渴いていらんねえだと。それ、その化け物がよ、途中で休んだちゆうから。(その休んだ隙に)急いで(逃げた)はねただと。こっそりと抜けて。川さ水飲み行ったが速いか。そうして、(奥さんが)うちさ(逃げて)来たらば、ほうれうちのおやじが戻って来てて、

「なあんで今頃うちにいねえで、(外出して遊びまわっている)おし歩ってるんだ」

って、怒ったんだと。そうしたら、ここのうわけで、むすび一斗にぎってやったらば、あしたの晩にはどこさ泊まったらいかと思つて、風呂さへえっただと。そうしたら、櫛を投げて、

「風呂の中さいる」

と言ったもんだから、しよ（背負って持っていた）つてがれたんだと。その風呂（こ）

とな。そうして、（化け物が）途中で休んだところで逃げて来たんだって（説明したのだと）。

そうして、（化け物が）向こう山で、やっぱりブン、ブン、ブン、ブン 糸うみしてんだと。だから、狩人だから（空砲を撃った）ぶ（ぶ）つた（ぶ）ってよ。そうすつと、ぽつと（化け物が糸うみしている姿が）消えだつてけんども、またぽつと明かりがつかんだと。それでブン、ブン、ブン、ブンてやってたら、またぶつたらば、またぶつと明かりが消えただと。

そして、三回目には、本玉（実弾）こめて撃つただと。そうしたら、消えたままつかねえから、そうして あしたの朝行つて見たんだと。そうしたら、お（お）く（く）きな虎猫だつたんだって。う（う）んだから、昔は猫は化けたんだよ。

化けネズミの話

（沢）

学生でよ、学校さ歩いててよ、学問しねえで猫ばかりかいていた若いもんがあつたんだと、むかし。そうして、その人はほれ猫をかいて放し（絵を散らかし）、猫をかいては放したもんだから、先生に追い出されちゃつたんだと。そうして、うちさ（帰って）けえつて来たたら、むかしだからほれ、太郎とか次郎とかつていったただわなあ。

「太郎、どうしてけえつて来た」

と（父親が）言つたらば、

「学問しねえで猫ばかりかいていたから、先生に追（追）ん出されて来た」

つて言つただと。そうして、

「追（追）ん出されるような者は、うちで（要らない）いんねえから（出ていけ）いげ」
となつたと。そうしてほれ、昼間から行つたが、なんぼ山の中のもんだか、行けども行けども周りに明（まわ）かりのついてつとこねえと。そうしたら、ずう（ず）くつと奥さ山の中さ、明

かりが見えたんだと。そこさ行ったんだと。

「今晚は」

って。そうしたらば、

「私のこと 一晚ここに泊めてくんちやい」

となっただと。あ、(そこには) 姉様がいたんだと。そうしたら、その姉様は、

「泊めらんねえ」

って。

「おらや^(私の家)では、その化け物が出て、今晚今晚一人ずつ食われたんだと。もう七人食われたから、今夜はおれが食われる番だ」

と。その残ってた姉さんが言ったんだと。

「いや、食われてもかまわないから泊めてくんちやい」

となったんだと、その人は。

そうして、学校さ行ってるように(その人は)猫をかいでは放し、猫をかいては放して、所(家)いっぱい猫かいちゃっただと。

そうしたら、その、出て来たんだと、化け物がよ。そうして、みっち、みっち、みっち、みっちとはあく音をたてて来んだちゅうから、その姉様は気が気でねえちゅうだから、自分が食われっから。

そうしたら、(化け物が)近くまで来たところが、そのかいた猫が生きてその化け物にかぶついたんだと。そうしたらまあ、やっぱり古ネズミだったって。每晚一人ずつ食ってたんだって。むかしは、こうゆう風に化けたもんだか、どんなもんだか。

化け物の話

(早渡)

あるところの郡境ぐんさかいに化け物がいたと。それは、一つ眼まなこの団十郎、二つ目玉の団十郎。足の長いもの化け物、手の長いものと。これらが博打ばくち打ちということだ。そうして、こいつらが集まって博打ばくちを打っているうちに、化け物の話では、

「世界で一番おっかねえものが、まだあんだ」
みんなほうとたまげた。

「それは何、なんていうもんだ」
となったらば、

「それは鎌倉こんごうの権五郎だ」
ということだ。

「それにさわら（触れられたら）ちやえば、舟も何もくだけちまう。とっくみ合いやったらば、ふん投げられちまう。いや、それぞれあ（荒っ）ら（ほい）ばい、おっかねえもんだ」
「そんだ、そんだ」

となつて、博打打ち達が酒飲んで、ほんでしゃべつてゐるわけだ。

そうしてゐるうちに、一人の旅の人が、化け物が出つてこでおっかねえからは（小屋）にゆうさ（上）が（上）つてたんだ。そうして、黙つて聞いていて、鎌倉権五郎はこわいやつだという話を聞いて、『そりや大変だな』と思つて、その晩はそのままだつた。

（翌日）あした、今度は、はにゆうさ（上）が（上）つて（化け物を）待ち構えていた。そうしたところが、前の化け物達がそりそろつて来た。おっかねえ化け物がいつそう（増えた）。

そうして、（博打を打っているうちに）またいろいろな話になつてな。まず、

「世の中で一番おっかねえのは、鎌倉の権五郎だ」
ということだ、きのうのような話を語つた。その博打打ちの野郎の化け物の金は、それはたいした金だ。化け物にはもつたない。そうして、金を、まだほれ、男ははにゆう（上）にいるもんで、そうしてこ（こ）つちでは酒を飲んでるから、こ

こで取ればいいなあと思って、(男は)鎌一丁たがって、

「鎌倉のえびだあ」

と言って(上から)落ちた。さあ、そうしたら、野郎まぢがえったぺえ。『権五郎だ』と言わないで『鎌倉のえびだ』なんて言ったから、

「おお、酒の肴さかなに鎌倉のえびとはうまいなあ」
となって、全部食ってしまったというお話。

ひとくちばなし

(早渡)

いなかから出(出稼ぎ)はげみに行ったところが、三年かかって、
そうして一円五十銭という大枚(たいまい)(多くのお金)を取って来た。そうしてらうちに、帰る途中で、その一口話(ひとくちばなし)という舞台があったので、それさまず立ち寄ってみたわけ。そうしたところが、

「大木おおぎの下より小木こぎの下」

ということになった。

そうして、そこを出たところが、雷らい様がくもってきて、ガラガラガラとたいしたそれこそすくむような音だった。今、聞いたところでほれ、『大木の下より小木の下』という事になって、考え直して小木の下さすくんだと。そのうちに雷様が大木のところに落ちて、大木が二つ割れになつてしまつたと。これは一口話でよかつたと、聞いてよかつたということになった。

そうして、今度また一口話というのを聞いた。そうしたところが、

「縁の上より縁の下」

となつた。そんで、(神社の)縁の下さ泊つたと。んで、博打打ちが来た。それは三人で来たわけだ。そして、博打がほれ終わった。ところが、お酒を飲むわけで、そうして三人のうち一人を酒買いにやつた。ところが、酒を買いさ行った人は、その酒の中に毒を入れた。そうしているうち

に、あとの二人で待っている人は、あれを二人で殺してしまおうということになった。

そうして、酒を買いさ行って戻ってきた人を二人でとっくんで殺してしまつたと。そうしたところが酒に（毒が）入っているのわかんないから、それをぐつと飲んだところが、二人とも死んでしまつたと。

これは儲かった。その三人ぶりのお金をみないただいて、ほんで国に帰ることになった。それで今度また一口話で、「ましてしばし」

となった。そうして、二日も三日も道中かかったわけだ、家に帰るまでにはな。そうして、来たところが、十二時ごろ家さ着いた。そうして、

「かかあよ。今帰ってきた」

そうしたところが、

「お帰りですか」

となつて、戸を開けた。そうして、入つていった。ちよつ

と座敷を見たところが男（おとこ）人の姿がちゃんとあつた。

「こうり（こんな） かかあとは思わなかつた」

腹立つたまぎりに、

「し（素手でけんかする）しばしをつかん」

まあ一口話のとおり、

「ましてしばし」

となつてひかえた。（男は）、

「おれがわり（わり）かつた。今、おまえさんをや（や）らうと思つたところが、これはやってはならんと思つてひかえた」と。

そうして、さん（さん）ぞ（ぞ）ば（ば）や（や）じ（じ）ゆう（ゆう）そ（そ）ば（ば）以上も持つてきたお金で、一生暮らすようになったというお話。

ふんどしの川流れ

（堂小屋）

六尺の長いふんどしが、川さ流れて来つわけだ。それが、

杭さひつかかってなかなかいがねえわけだ。それで長い話は、ふんどしの川流れのようだというんだ。

昔ばなし（旅人殺しの話）

（早渡）

郡境に一軒家があったと。その一軒家では、お金を持っているような人をみんな殺して、金を奪い取って、殺した者は、縁の下に埋めていく。そうしておいたと。あるとき、坊さんがやって来たと。なんかありそうだったから殺した。そして、縁の下き埋めた。そうしたところが、木が生えてきて、家の中をぶんなぐるように。それを切った。切ってもまた出る。切ってもまた出る。呆れけえつちまっつて、ぶつちやばいておけ、とこうなった。

そうしたところが、ギユウと育つて七・八尺になったと。七・八尺になったところさ坊さんがなって、そっちの坊さ

んはかね叩き、こっちの坊さんは太鼓叩き、笛吹き、いやチャリン、チャリンと大した音楽があつて、いやとてもにぎやかだった。

そうしたところが、部落の人から評判になって、みんなそれを見さ来るわけだ。そんで、欲がまたそこできて、一人なんぼというお金を取ったんだ。そうしているうちに、役所の方から出張に来て、なるほどとなって、今度役所さ呼び出されて、そして聞いたと。それは、

「木は何年前から」

「五・六年前から増えたもんだ。そんで、切っても切つても出て、傍はたには黙つておいたところが、そいつに坊さんがなって、かね叩くやら、太鼓叩くやら、笛吹くやら。いろいろ大した坊さんがそっちにもこっちにも枝いっぱいになった」

そうして、

「枝もあるか」

「枝もある」

「木の高さはなんぼ」

「七・八尺伸びた」

と。そんで、

「葉はあんのか、葉がないのか」

ということになった。そうしたところが、

「葉は一枚もない。葉なしだ」

と言った。

「ああそうか。そんでは『話はなし（葉なし）』としてしまえ」ということになって、役所では、それを昔ばなしとしてしまった。それは大した幸福もらったわけで、そうして一生夫婦は、家内満足に暮らしたことができたというお話だ。

【みちくさ】お団子のおはなし

馬鹿婿ばかむこが あれほどまでに食べたがった「団子」。現在の私たちに馴染み深いのは、串に刺して餡あんなどをつけたものですが、昔の「団子」はどんなものだったのでしょうか。

米粉を水で練って丸い形にしてから蒸したものが団子です。米の他、麦、粟あわ、稗ひえ、黍きびきびなどでも作られます。普通の農家では、年貢米で良い米を納めてしまうので、残るのは屑米。それを団子にして常食にすることもあったようです。また、餅と同様に彼岸や祭りなどいろいろな物日や折り目に作られました。馬鹿婿の場合は、珍客だということとで、団子でもてなされたのでしよう。

団子の製法と名称は、古く中国から伝えられました。あちらでは、中に餡の入ったものを「団子」（とあんず）、入っていないものを「円子」（ゆあんず）というそうです。いにしえの日本人は、この円子と団子をとりちがえてしまったのですね。

【伝説】

しだれ縦もみの由来と金の鶏にわとり

(堂小屋)

その、徳川初期かなあ、もつと先(以前)かなあ。都からお姫様と腰元が毛戸もうとの糠塚ぬかづかちゆう所に来て、何をしに来たかっていうと、何かやっぱりそういう公家様でなくとも、都からはるばるまあ、保養に来たっていったっけなあ。

まあ、そこに長く居たんだが、どうにも都さ戻(もどろなければ)んな(ならなくなつた)わねえ。お姫様は。ところが、腰元っていうのが行がんねえことんなつちやつた。というのは、その糠塚だか毛戸の若い人と仲良くなつちやつた。そして、行がんねえ。若いもんだもん。

それで、一緒に都に帰らんねえということになったわけだ。腰元は、そういう事情のために行けねえとなったとき、

そのあわれを偲んで、縦の木の枝もこう下がったと。腰元というのは、長くお姫様に仕えている人だから、京都市送っていけばいいだが、送ってがねえ事情ができた。お姫様もそれは納得して、んだらばここで別れるほかねえ。そして、縦の木がしだれたんだ。

金の鶏っていうのは、どうして金の鶏そこさくつつけたか(お姫様と腰元の話にくつついたのか)わかんねえが、とにかくあそこんどこでは、現在でも鶏(飼って)たてても鶏が成長しないってことだ。

それはなぜかってと、金の鶏がいるために鶏たてても成長しないという。何のためにその金の鶏、誰が持ってきたかちゆうと、そのお姫様達が持ってきたものだかなんだかわかんねえが、とにかくそういう話は(ある)。

(そのために)今もって遺跡調査やっただよ。金の鶏、金の塊なんざ出なかつたけどね。

法印様とキツネ

(堂小屋)

昔、コミセン(川内村のコミュニティセンター)の辺りは、草刈り場といってな、馬の(餌にする)草を刈る原野だったんだ。それで、ここに下川内しもかわうちの人で、上法印という法印様なんだが、何かこう人に生活の上に役立つことを語って歩いたり、法事なんかをやったと聞いているんだがな。その人が、ときどきこうキツネに化かされるっちゃお(というか)そのそういう人だから、キツネと懇意こんいにしたというわけでもあんめえけど、こう下、上かみ(川内を)歩くうちに、こうまあキツネと仲良くなったわけでもあんめえけど(普通の人よりよく知っていたのだろう)。

その法印様があるとき、上川内かみかわうちの方に親戚があつから、その親戚のとこさ行くために通つたらば、中学校のところの峠を通り越した辺りさ行つたらば、大きなキツネがその昼寝しているんだな。昼休みしていたわけだ。それで、「ヤッコさん、いつも俺のことを馬鹿にすつから、今度は

俺の方でひとつ脅してやろう」

そして、グースカ、グースカ寝てるキツネの耳さほら貝をおつつけて、ブーンと鳴らしたわけだ。そしたら、キツネはこんでもねえ(ほかでもない)お昼寝してるところやら(やられたから)つちやから、パツと思つて目覚めたところ、ほれ常に馬鹿にしていたところのおじさんだなあ。そこで、たまげてほれ、ピョーンと跳んで上がつて後を振り向き、後を振り向きそのキツネは藪の方さ逃げて行っちゃつた。

「ヤツ、よかつた。今まで俺のこと馬鹿にしていたが、今度はいっぺんにその仇をとつてくれた」

ま、テクテク親戚のとこさ行くべくあの道をこう登つてたら、今脅かしたキツネがテコテコまた出てきたんだと。

「なんだ。ヤッコさん何(何しに来たの)さ来つしやる」

たらば、道のまん中さ来たつけが、馬糞ばふん、馬まグソだが、まああるのが乾いて、ちょうど子供の頭くらいなんだ。それをこうちよつと、首の上さ上げたつけが、それが子供に

なつて、そして今しよつたのは、まさにキツネなんだが、それが尻尾しっぽも何もなくなつて、いいあんばいに小娘さんになつちまつた。それでこういうふうに手拭いを持つて、こゝ子供をぶつて、前になつて行くわけだ。

「何だ、今度は俺のことを馬鹿にする気だな。ようし、その手はくわくつてない。どこまで行くだ」

後あとから追つていったが、そしたら行くも行つたる、ずーつと（行つて）自分の親戚の家の門口まで行つたが、そこへ入つていったわけだ。そいつは、

「野郎、何をやらかす気だろう」

とは、こころこころ中には思つていたが、

「まさか俺を馬鹿にする気ではあるめえな」

とは思つていたが、そんなに馬鹿にしやさちらんねえ。（さされてはいられない）そして、まあしばらく来なかつた助四郎という親戚の家なんだが、自分も入つた。

「しばらくで、下の上法印様」

（などと挨拶していたが）

「しばらくはいいが、今こゝへ入つて来た娘さんのぶつてるのは馬グソだし、だいたい子守してる娘はキツネだかんな」

て。そしたら、その家の者はたまげちやつたんだな。

「なんで家の娘、孫おぶつてるのもキツネとは何ごとだ」と。

「いやいや、間違いいねえ。俺が道のはたで、こういうふうにして脅かしたところが、すぐに山から下りてきて、ちやんとこういうふうふうに化けこんじやつた」

「いや、そんなこと言つたつて家の娘だし、孫だから」

「いや、何も争うことねえ。ここぞんだから、そのキツネだかキツネでねえかは、すぐにわかんだから、その娘さつちめて、そしてぶつてるもの囲炉裏の中さくべてみる。これは人の子でも何でもねえから」

「いや、とんでもねえ。下の法印様。しばらくぶりに来たとはいえば、とんでもねえこと言うは。そういうあれはねえはずだ」

「そんなら論より証拠だ」

となつて、そいつをとつかまえて、いるし(いろり)さ放り込んじやつた。ところが、何かギヤーギヤー、ギヤーギヤーあげたけれども、死んじやつたわけだ。死んだつて、ほら、間違ひなく人の子なんで、馬グソにはなんねえわけだ。(すると助四郎は)、

「さあ、何事言うた。これは家のかわいひ孫を殺してからはただではおかねえ。んじやあ、俺はあんたの首をもらう。覚悟をしろ」と。

「しかし、これはどうも相済(あひ)まねえことになつたが、首を差し上げるほかねえか」と。

「いや、それでもねえと。首とつたつてしようがねえし、あんたの首いらねえけつども、しようねえ、その(赤ん坊の)代にもらう」

それで、その助四郎て親戚のおじさんが、まず刀を持つ

て来て、

「下の法印様、覚悟しろ」とて、

「いや、覚悟すつぺなんともしよね。こうなつてからは、申しわけたたねえから、首を切つてもらおうべ」と。そのうちに、

「よしきた」

となつて、スパツとやつちやうわけだ。こら首切らつた。だから、まず死んじやつたわけだなあ、下から行つた法印様も。

ところが、なんだかこうガヤガヤ賑やかになつてきたなあ。す(するど)とあたりがポーッときて、この霧のかかつたように、おう朝になつてきただな。ところが、ほ(その)の向(ま)こうの方の若い手が、草刈りに来たわけだ、馬をす(引いて)えて。

「なんだ、この下の法印様、この野っ原さ寝てるちゃあ」「寝てるちゃあ、おかしいな。起こしてみる」

そしたら、

「俺は今、助四郎に首を切られちゃったんだから、だから俺は死んでんだ」

と。

「死んでいる人、口きくっちゃ変だな。とにかく起きてみな」

「言ったんだってよ。そうして、起こしてみたところ、なるほど、これは親戚の家の所ではない。まだまだ親戚の家さは、こっちから数キロあるにもかかわらず（寝ていたわけだ）、

「あー、そんでは俺はやっぱりキツネに化かされたんだな。なるほど、あんどき（絶対）大丈夫、キツネだと証明しようとしたんだが、囲炉裏の中さ入れてみたら、キツネでなく孫だった。孫は死んじまった。そのために俺は首を差し上げるようになったちゃって、首を切らっちゃうわけだけど、そういうえば（首がなければ）口がきけなくなるわけだな」

（若者は）、

「なんだ。下の法印様、キツネに化かされたのか」

（つまり）法印様は、まあ、その家まで行かない途中で、キツネにとくとく化かされちゃったわけ。まあいつかは、今度またキツネの仇とつてくれねば、どうにも、ときどき馬鹿にしゃれつから（と思っていた）。

「そいで、いっそうキツネってものは、この世の中からなくしまえば、そういう目に会わねえだが、なんとか退治してしまいたい。そいでそのあとまたキツネに会ったんだが、

「キツネだつて位は欲しかつぺ。京都さ行けば正一位、稻荷様つうおめえらの親方様だが、稻荷様のように正一位の位がもらいたいければ、一族郎党みんな集めて京都さ連れて行って、位をもらうことが出来るから、全部ありとあらゆるキツネ集めると。そして、俺が京都さ連れて行くから」

「そしたら、たくさんのキツネの数を集めたんだ。」

「そして、どういふなんだ（どうして連れて行くのか）」

「どうもこうもねえ。とても一遍に連れてゆくのはなんだ

から袋さ入れ^{はい}」

まあ、でかい袋の三つ四つ持ってて、そいつへキツネがみんな飛び込むわけだ。袋いっぱいになって、一袋、二袋と子から孫から皆飛び込ますわけだ。

「これはうまい」
と。

「あとはいないのか」

「あとは一匹もいねは。皆集めましたから、これで京都さ行って位をもらってくれば文句ねえ」

そして、よしと袋の口を麻縄でギッチリとしめちやって、そして出らんねえようにして、

「位はどんなところが欲しい」

「いや、位はどうせもらう位だから、軽い位でなく重い位が欲しい。正一位の上でもいいから」
と。

「よしきた」

と。(法印様は)『重い』かけや』で片端からボンガン、ボ

ンガンはたいてしまった。いやあ、キャンともなんとも言わねえで、中でほとんどやられちゃったわけだ。

それで、

「あー、よかった。今度こそキツネに馬鹿にしやれっこねえ。こったけ殺しちまえば、あとは界限にはキツネいないわけだ」

それで、多分皆死んだから、はあ何と袋をガラガラ、ガラガラ開けて、

「いやー、皆死んだ。死んだ。やーよかった」

と(喜んでいた)。

そして、最後の袋を開けたところが、ピョーンと一匹飛び出したんだと。それがなんとはらんでいるメギツネ。それが出ちゃったから、それでまたまたキツネが増えてしまったんだというんだ。

だいらギツネの話

(堂小屋)

(一)

そのだいらギツネには、鑄掛^いけ屋が馬鹿にされちゃつて、そいで松の木の根っこさ、(溶かした金属がしたる様子)ツークツクツクやつて溶かした鉄を、松の木の根っこさ(注いだ)つぐんだと。一生懸命つぐんだと。

そして、とつくと注ぎ終わっただつpegが、材料なくなるまで。そして、何やってんだつたら、

「酒屋の大釜、鑄掛けてくれつうから鑄掛けた」

なんと、大釜ではあんめえ。こんな松の木の根っこさばかりあけちゃつて、それもだいらギツネだったつちゆうことだ。

(二)

神楽^{かぐら}ぶちが、一日林の中でタラスコタンタン、タラスコ

タンタンとやっていたそうだ。これは皆してだまされちゃつたんだなあ。朝からやつてたつうから、夜でもあんめえ。そばで見ればおかしかつぺな。

(三)

汽車がな、ポツポツポツとやつてゆくと、向こうからもポツポツポツとやつて来るんだと。なんとも前へ出らんねえんだと。危なくて衝突するよ。そうすつと、段々向こう走つちやつてゆくそうだ。そいで、それもキツネだということだ。

木挽^{こびき}きとゴウシユウさん狐

(平沢)

あそこんところに、山があるでしょ。あれ、タテ山つて

ウさんギツネという狐がいたんだ。

小学校の先生とゴウシユウさんギツネ (平沢)

昔、小学校の先生にな、コウサカ先生って先生がいちつたんだ。その先生、だまさってなあ、狐に。

雪の降ったときで、夕方、町からシオビキ(塩鮭)を買って持って来たんだ。なんぼいっても元のところさばかり行くんだって。またそつからグルツと回って、またそこさ出て来る。

それからそのシオビキってのは、糠でつけたから、黄色い糠がひつついてつから、その糠をずうつと我が行った道さしるべで行ってみると、またそこさ出んだって。

一晩歩いて夜九時頃に、堂小屋さ出たんだって。いっそ雪ん中越えて、腰きりボタボタになって、狐にばかにしや

れたってことはわかっていたから、その人は。自分でほれ、魚持ってたから。その魚だけはとられちまったつた。

魚なんか持ってたつと、必ずだまさつちやうんだなあ、他から来た人は。それもゴウシユウさんさ。あそこに狐の宿があつてなあ。

ギツネにバカにされた話 その一 (大根森だいこんもり)

俺はこの生まれでねえ。下川内だから、下川内からこさ嫁に来たわけだから。で、下川内で おらのお父つあんがほれ、配達してたわけだ。配達つうと、今の配達は昔、ていそち遞送つていっただ。昔は富岡から富岡の駅まで行って来たわけよ、歩いて。歩いて行けば八里もあつたから、こんなこそ山の多い道で、そんな山を歩っているようなもの

だったから。

そうしたら、おら、昔話で聞いたんだけど、そうしたらば、夜、ほれ、川内村から川内村さ手紙かなんか来たの富岡まで行って持って来た。そいで局さ持つてって配達するわけだ。それをほれ、やってたわけだつぺ。通送つてい
うのかはあれ。

そうしたらば夜、夜通し歩くから、ほれ夜になっちゃうべ。朝、夜中起きして行つても、夜になっちゃうんだから。八里ぐらいあんだつぺ。それ往復だもん。夜になつたら、
こういう山の中の中間で、家うちも何もないとこさ来たならば、
下川内の野馬(地名?)さ近く来て、鶏が鳴いたたつて。朝方
だつぺな。はあ、もう鳥鳴く時間かなと、心の中で思つた
つて、一人だから。昔は配達する人は、提灯ちようちんつけて歩つて
たんだ。

そうしたら、鳥鳴く時間かなあと思つたら、キツネがいた
だつぺ、その辺に。ほうして鳥鳴く時間と思うのは、キ
ツネがほれさぐつたわけだ。そして、心をさぐつたから

鳴く時間と思つたらほれ、鶏が鳴いたつて。あれもう鳴く
のかなあと思つたれば、鳥でなかっただつぺな。(本人は)
もう一回鳴き声を聞きたいもんだな。鶏鳴くときは、こう
パタパタやんだから、羽根かな。こういうふにパタパタや
んねえでなかったか。それは気がつかなかつたつて。

sonだから、気がつかなかつたから、いま一度、鳥なら
鳴くわけだが、落ち着いて聞くべと思つて、耳すまして聞
いていたわけだつぺ、歩いていながら。

「あ、これはキツネに違いねえ。俺のことだますのにキ
ツネが鳥の鳴き真似しただ。それじゃあ、歩つてはだまさ
れるから、歩かねえで行こう」

つて。そして、ほれ山道だから、こういう真つ暗な山道だ
からそこさ腰かけて、そして、あの火をたいたんだつて。
火をたいて休んで、たばこでも吸つて歩いた方がいいと思
つて、夜明よるけるまでいてもいいが、夜明けるまでもいらん
ねえから、たばこでも吸つて休んでいくべえと。

そうして休んだらば、そうしたらそれがキツネだつたつ

ぺ。こういう火の玉すわっちゃったから、だませねえだつたつぺな。こういう火の玉何回も転ばして、目の前で転ばして、ああこれは鶏でなかっただわい。これキツネだなあと思つて、そんなとき察した。

やっぱり気持ち悪かったなんて話聞いたつたからよ。キツネ、人の心つて探さぐんだわな。

キツネにバカにされた話 その二 (林)

だいばらというところがあっただ。そこにはな、キツネがおつてな。

キツネが子供できんだと。それで医者様頼みに行つて、医者のこと乗せてきて、それでキツネのお産をやつてきてくれただ。そしたら、ほれキツネだつたつちゆう。

キツネ火 その一 (長網)

こつから行つて山に入る部落のはずれに行つたら、大変火事になつてる所があるんだら、燃えて。からだかへへとに綿のようになつて疲れてるので、それを見ないふりして帰つてつて、明日の朝、通つてきてみたならば、どこも焼けないでそつくりして、それがやっぱりキツネ火ということだ。

結局、キツネに火を見せられたというわけだ。ということは、その脇にちょうど稲荷様があつて、その前を通つて来たんだ(だから、キツネに火を見せられたということだ)。

キツネ火 その二 (林)

(山に)あかりがつくと、そのあかりが、つつつつつつつと灯ともつてきて、そしてその近くの田んぼの辺り

まで行くと、提灯ちようちん並んだようにポツポツと灯って来るんだって。

そして、それを親達が見てるんだけど、あの私らは小さいから、それがはーものすごく恐いなあ。もうはーふとんから出て来れねえのよ。

そして、息殺してふとんにもぐつてると、ポツポツポツポツと（火が）灯ってきて、そしてそれがポツと一つ上の（火が）消えると、全部ポツポツと消えちまうだ。それがキツネ火だなんて騒いでんの聞いて、ものすごく恐くて、もうふとんの中にもぐりこんじゃって。

キツネの嫁入り

（持留もちどめ）

キツネの嫁入りは、私らも見たことがありますね。その向かいの部落に行く道のところなんか、夜見ると提灯が

バツとついて、この辺の人たちは、あれはキツネの嫁入りだといったなんてこともありましたね。

キツネの話

（林）

二区の高田島に行くところなんだけど、夜お葬式ができで、親達が夜遅く帰って来たんだ。そうしたら、あの静かな闇夜の晩だったって。

そして、『えどの入り』という沢さわなんだけど、その沢で一斗缶いっとかんを叩いたようなカンカン、カンカン、カンカンという音がすんだって。そして、立ち止まって、二人してうちの父親と隣りのおじさんと立ち止まって、聞いてたんだって。

「なんか変な音がするなあ」
と。そうして、また立ち止まっていると、またカンカン、カ

ンカン、カンカンと音がする。あれは確かにキツネがああいう音をたてて、馬鹿にするのにあんな音をたてたのかなあ(と思った)。なんて話は聞いていたよ。

キツネに化かされた話

(宇津川)

(一) カツオをとられる話

昔、ここはね 炭山、炭焼きしている人らが入って来た山なんだ。ここは昔、山だったから。

そいである、魚買いに行くには、ほんとに酒屋に三里、豆腐屋に一里ってなどころだったからここは。そいで魚買いに行ったわけ。そして、魚を買って、カツオを一尾買ってしよって来たの。

そうしたら、途中でやっぱキツネに化かされちゃったのよ。そうして、どこか山にでも連れて行かれちゃったのか

な。

「おお深い、おお深い」

ってこいで歩いて、一晩中そうやってこいで歩いて、今度はしまいに発電所の高い所の石の上に、あの一夜明けてみたらその人ほれ、いたわけよ。

そしたら、もうキツネにカツオはもう取られちゃったんでしようよ。なくってはあー、ポケポケと目が覚めてキツネに化かされた話。

(二) 桑畑で化かされる話

子安川の西の年寄りじっち、その人役場さ出かけたんだと。そして、夜なつてから(帰つて)来て、そうして瀬耳上せみがかみのうちさ回つて、提灯貸せつて。提灯昔は弓張提灯ゆみはりちようちんでな、それをそうして貸してやったんだと。

そうしたつげが、子安川とあのおー、瀬耳川の間にある桑畑があんだよ。そうしてそこさ行つて、今度はキツネに化かされたんだと。そうしたらその人は今度は、その桑畑

の中をおお深い、おお深いってこいで歩いてらったと。

そうしたつけが、瀬耳上から持って行った弓張提灯は、ざらざらにはあ、おっつあけちやってはあ。そして、おお深いとおお深いって言うだと。そしたら、そこへ誰か向こうから来たんだと。そしたら桑畑の中からおお深い、おお深いって声がしてたんだと。変だなあと思っつて、桑畑の中見てたんだと。

そしたら子安川の西の年寄りじっち、その頃は羽織・袴だから。そうしたらその人、キツネに化かされてるんだと思っつて桑畑から(年寄りじっちを)普通の道さ連れて来て、そして連れてつたと。キツネに蠟燭ろうそく取つて食われちやと。

(三) 道が遠く感じた話

むかーし、三年生ぐらいのときよ。大滝の部落に住んだことあんの、昔。親達そこにいたつたから。そんなとき、たいてい離れてねえんだ。今でいえば、こつから手古岡てごおかぐらいの道のりだと思っつんだ。そこさ使いに行つてうちに戻つ

て来るわけなのよ。

もう行けども行けども遠くて遠くて、そのいつまで経つても自分のうちに帰つて来れなかつたことあるの。小さい時なの。多分、今考えつと、あれはキツネの仕業しわざかなあつて思っつた。

カワウソとキツネ

(堂小屋)

川内にもだいぶカワウソがいたらしいんだがね。カワウソはほれ、毎日川の中さ潜もぐつていつて、イワナをおさえて来る。そして、常にカワウソはこのイワナをさしておくわけだ。

そすつと、キツネはときどき、いや朝晩ぐらに行つたてか、そいつ食いてえから。そいでまあほめて、

「よく(イワナを)おさえるもんだ。上手なもんだ、カワ

ウソさんは」

今日も来てごっつお(ごちそう)になるわけだが、

「なんじよ(どうやって)してそれをおさえるんだか、おさえる方法を俺にも教えろ」

てえわけだ。そこは、カワウソも考えたって。

「ヤッコさん、人の捕って来たのただ食って、まあウサギの肉の一つも食わせるんなら(いいが)、そうでもねえ。キツネは悪がしこいし、ずるいから、たんまりごちそうんになって、(その上)魚のおさえ方を教えろとこうきた」

カワウソは(少し頭を使い)、

「よし、魚捕りの方法を教えつか」と。

「一番寒い夜、しばれるような夜に、いちばん魚のいそうな堤に尻を浸しておくんだ。そうすつと、夜の夜中んなくてくつと、魚が寄って来て、尻をみなつかむんだ。そこを引き上げてゆくと、一遍に何十匹という魚がおさえられるんだ。いつ(いつとも)こ簡単だからやってみなさい」

と。

キツネはカワウソに教えらつちやとおおり、

「今夜は、とても寒い晩だからカワウソ殿の言うたようにやってみよか」

と思つて、魚のいそうな静かなとこさ尻を浸しておいたと。宵のうちには、ちつとも軽くてきかなかつたが、だんだん十二時過ぎになったら、冷えてきたと。どうも寒いけれど、我慢してまあ尻尾(しっぽ)を浸していたところが、どうやらこう引くと、重くなるような気がした。まだまだ浸しておこうと。

だんだん十二時過ぎて、一時、二時ごろなつたら、どうにもこう動かなくなってきたから、欲が出てもう少しもう少しと待っているうちに、少しぐらいの力では、上がんねえぐらいになってきた。なおなお浸してたら、太陽が上がるころまで浸していたところが、子供らが(学校へ行く途中で)見つけたわけだ。キツネが川んところにつくばってから。

さあ、大変だ。やろっこらに見つかっては命がねえ。さて、上げべとのだが上がんねえ。なにほど きてただか魚が。(よく見ると) 氷が張っちゃって、尻尾がかたまっちゃってるから上がんねえ。魚がきいたか、氷が張ったかわかんねえ。そのうち、子供らは、棒たがって追い回すわけだ。こいつで殴られれば、ひとたまりもねえ。それからまあ、さあ大変だ。みつちりでも動かない。

「小ぶな、小魚みな逃げろ」

それから、エンヤ、ヤのヤーと引張ったら、尻尾抜けどちやった。

それで、命からがら山さ逃げて来たが、どうもこれはいっぱい食わされたわけだな、カワウソに。さすがのキツネもするがしこいが、カワウソには、参ったということだ。

カイコ様の話

(宇津川)

昔、上川内なんだよ、それがな。そこでは昔、みんなカイコ様うえてたんだ。座敷さ置いたから、みんな棚吊ってな。

そうしたところが、ネズミが出てカイコ様食ってしようがねえんだと。そして、御諏訪様拝んだんだと。ネズミに食われねえようにしてもらいてえって。そうしたら、なんぼ拝んでもネズミが来て食ってしようねえんだって。そうしたら、その家のおとつあまは、

「シヨウ(御諏訪様御自身)で来てもらいてえ」

って頼んだんだと。シヨウで来てくれなんて 拝むもんじやねえけどな。そして今度、その晩には、そうやって寝たんだが、あしたの朝、カイコ様見るのに戸開けたら、蛇が座敷いっぱいになっていたと。それが座敷さびかびかつといたんだと。そして、たまげてやっぱりほれ、神主様を頼んでお詫びしてもらって。

この家では、毎年祭りでは、家内中してみんなしてお参りすることにして、お詫びしてもらったんだと。大夫様にな。そういうことがあったって。

だから、御諏訪様の御神体の大蛇ではないかって言い伝えなの。だけど、大蛇は御諏訪様の御使いかもね。

大蛇のたたり

(宇津川)

(場所不明)
あそこさ来て、炭焼いてたんだっていうな。そうしたら、何だかカサラ、カサラっていうんだって。そして何だっぺ、そしてその人が・・・で切ったつったか。(と言った)で、切ったらば、蛇だったんだと。ほうで、(それで)切って、そしたらギリッ、ギリッ、ギリッっていうだと。

そしたら、切られたもんだから、蛇は今度は小屋を巻いて、ぐるぐる巻いて、潰つぶしてしまうところだったんだっ

てよ。そうしたら、ようやっと小屋開けて、そうして蛇をまたがって逃げたつったか。(と言った)

そして、その人は・・・病やみして死んだって言わなかったか。それで、その崇たりあつたつたは、その人はそのままで頭おかしくなつて死んじやつたつたか。

そのあと生まれてくる人は、その蛇の崇たりでうまくない人が生まれてくるんだって。

大蛇のたたり

(堂小屋)

昔は椎茸をきのこ山へ小屋をはって(作る人がいた)。少し奥まった所さ行って、(そこでは)自由に木を切られっかんな。木を切つてきのこの胞子っていうんだらうか、そいつを増やしてきのこを採るわけで、(そういう)きのこ小屋を造つた人があつたんだ。その人はやつぱりきのこを採

るべく小屋を建てて、そこさ毎晩きのこの番をしてたんだ。

ところが、毎晩のように風が吹かなくても、向かい山がこう笹がカサカサ、カサカサ、ガーサガサちゅうのが、風がねえだからそういう音がするわけねえだが、ちようど夕飯過ぎて十時頃、寝時になった頃がその向かい山の笹がザワザワ、ザワザワ音すんだつな。それで、その人は寂しがり屋でもあったかどうかは知らねえが、きのこ番しているうちに、刃物でも研いでいたわけだ。

ところが、二晩三晩住んでるうちに、また向かい山の笹がザワザワ、ザワザワ音たてる。ほいであんまりいい気持ちもしないし寂しいなと思ってたところが、あの小屋の入り口さ、こういう萱で造った小屋だな。

その入り口さ顔を出した。それがとても大っきな蛇だ。ペロツと顔を出つちやから、その人はとても驚いたの驚かねえのって、その研いでたヨウキ(斧)を頭めがけてバァーとやっ(投げつけて)て、そして今度は裏(小屋の裏のほう)の小屋を手で曲げて、そつから体が出るくらいまで骨折(どれほどか骨をおっただろう)つたつぺ、なんぼか。もつとも火

事場の力つてとあつけな、おつかねえときには、力が出んだつぺ。

そいで、そつから逃げ出してな。ほ(そして)で、我が家さ来たわけだ。着のみのまままで。そいで、家さ来たんけんどもシヨックでな、二晩くらいは口もきかないで寝てたわけだ。ところが家族の人が心配して、

「あんた何なんだ。風邪ひいたではねえのに」と。

「いや、こういうわけで、夜な夜なガサガサ、ガサガサ、前の笹山が音すんだて。何事かあんのかな、何のあれだかな、風がねえだからそんな音するわけねえと思つたところが、最後の晩には、小屋のとつ(入口から)から、こういう大っきな大蛇が頭出したと。それで持つたヨウキをいきなりバァツとやつてきただから、多分死んだつぺ。だから行つてみればわかつけども、俺はもう行かねえから。だからそいつが実際そうなたかどうだか、隣近所の人に頼むより他ねえ」

すると家族の者は、

「そんなことがあったんでは、じゃああまり遠くもねえだっぺから」

となつて、四、五人で行つてみたんだと。(すると) やつぱり頭きヨウキ刺さっちゃつて、少しは暴れ回つたんであろうけれども、まいつてた。やつぱり大きな大蛇だな。

ところが、大蛇は (死んで問題が解決した) それで事が決まつたわけだが、その家では、たびたびやつぱりその、若い者が死んだとか病氣したとか、そういう災い、それで災いがあつから何か祟る(た)のかな、と拝んでもらうと、『ナガムシの祟り』つてこういうわけだ。

『ナガムシ』ちゃあ『ナガムシ』だから、蛇はありや虫だな。その『ナガムシ』つちやあ何だろうとだんだん、だんだん追つてみると、あつ、先祖様がそのきのこ小屋さ行つて、その蛇が来て顔を出したのに驚いて、ヨウキを(よき・斧) 投げつけて殺したことがある。その祟りがあつて、どうも酷なこと、雷(らい)様が落ちたとか子供が病氣で亡くなつたとか、あまりにも災いが多い(ということであつた)。

(そして今度は先祖を問い詰めてみた)すると先祖は、

「なぜんだらば、蛇だつて人を驚かすにこと欠いて、俺は一番蛇が嫌いなんだ。それを俺の小屋さ首出したのは、どういうわけだ。俺はとてもおつかなくて、飲まれつと思つた。それで俺は、ヨウキでやつつけたんだ。それは自業自得(じごうじとく)だつぺ。なんにも死んだ後まで祟る必要はあんめえ」

と。すると、蛇にも言い分があつて、

「俺は、飲むためにまわつたんではねえ。俺の住んでいる所は、あれからずつと西南方の所に大きな池があつてな。ノマガタの池にいたが、俺は池のつから落ちて来る川に沿つてこう、夜運動に来るつつか、遊びさ来た。あそこさ通つたとき、小屋に明かりもあるんで、こうやつてちよつと顔出したのが、俺やられてしまつたんだから、何の俺には咎(とが)はねえ。あんたが悪いんだ」

ちゆうわけだ。

何だか蛇と人間の問答になるわけだが、それより『ナガムシの祟り』というのは、子々孫々(ししそんそん)まで祟る(ということ

である)。そんで、

「しよねえ、んだらばその斧を清めて家の氏神様として祀っておくから、この家さは、一切あんたは崇んねえでくれ。もうこれきりとして、俺も悪いかしんねえが、あんたも飲もうとしたのは悪いでねか」
と言つて今もつて金の斧はあるんだ。

松川原堤の大蛇退治

(堂小屋)

ここには松川原という所に大きな堤つみがあった。そいつさ尺八という、水がいつぱんに抜けないように(栓がしてあって)尺八のように穴があいてんだ。そいで、下からこうみんな止めてくんだが、最後に上さ杭を止めたんだ。その上となれば、水は満タンになるわ。ところが、尺八つていうのは、ていげい(たいてい)堤の真ん中つうか、土手よりもずっと向

こうに入つてるから、そこさはやつぱり橋をかけねば行かんねえくらい。

ところが、何にもかんにも水の欲しいときに水出て来ねえわけさ。と、この尺八という穴を大きな蛇だ、大蛇がいて巻いちやつたわけだ。んだから、何ともしよねえ、その大蛇を殺さねば(ならないわけだ)。そんでは仕方ねえから、その蛇殺すには、あの手この手と考えてみたが、どうしても誰か行つてその蛇をはたかねば。鉄砲などは、その頃なかつただかんな。やつぱり鋏鎌でたたつ殺さねばなんねえ。

そすたら、マタギ甚吉は、

「そいつ、わけねえ」

どんなことすると言つたら、

「とにかく皆して持ち寄れ」

と。(何かというと)麦炒つて、ひいて(粉にして)、香煎(こうせん)をだ。とても香ばしい味して、夏場においてそれ食つと下痢しねえ。早くいえば、腹ぐすりだ。その香煎をこせえろと。

そいで部落の（人たちは）堂小屋に集まって、麦を炒つて、石臼でひいて、まず香煎 こんのくらいできたわけだ。まず一斗くらいずつしよったかな。それしよって、松川原の堤さ行って大蛇退治だ。そいでほれ、十人くらいしよって行って、

「大蛇出て来い」

と。すると、（大蛇は）尺八巻きしめたのを緩めてきて、泳いで来たというもの。

真っ先に来て、逃げ遅れた奴の背中さ、ムツツリ噛みついたと。そうしたところが、それが香煎だから、大蛇がむせっちゃって。この間に叩たたけと、皆して叩きかかって、大蛇退治がそこで決まっちゃった。

だから、夏は香煎欠かさず炒っておくべと。香煎で大蛇を退治して、それから豊かな水が出て、米がとれるようになったという。

大蛇のたたり（蛇じやの口の由来）

（平沢）

蛇は昔、ジャつ（と言った）つたもんだね。それ、この宇津川さ行く所に、蛇の口ちゆう所あんだよ。昔はね、山さ椎茸をつくつてな。そして、小屋かけていって、そして、きのこをすつかり昼間とつてきて、夜串を刺して干したんだから。そして、山小屋さみんな行って、きのことつて来たんだ。それをやって あそこさ小屋をかけて、そこでひ（仕事をやる？）やーでるて。そしたら、一晩中その水流しておく所さ堀（堀）にしてな。樋（樋）かけておいて（水を）ドボドボ落としては、よおだ（料理に）に使つてたんだ。一晩中その樋がドボドボドボドボと音しては、いっぺんにザーと落ちるんだ。何だか不思議だなと思つてな、明日の晩にはヒ（よき・斧）ヨウキをすつかり研ぎすましてな、枕元に置いて、そして寝たって。

したら、やっぱり夜中になつたら、ザーと落ちるしよつてはドボドボドボドボと止まる。不思議だなーと思つてると、ほれ小屋かけてんだから、戸も何もねえからね。藁

でこう、こもを編んで、こう下げておいたら戸になるわな。

そうしたところ、そのこもをソロツとしつたつおして、
じんまい蛇(すまいじや)がそこへ入って来たつて。そして、もうおつか
ないから、自分でほれ研ぎすましたヨウキを投げつけて、
裏からやぶ手へ出て、そして西山の人だが、そこへ行つて
来たんだつて。

そうしたところが、今度は自分は、おっかない思いをし
て、モツケヤミ(病氣になつてしまつた)してやんだなあ。そして、その家さは、
ヨウキが祟つたというんだ。神おろしをやつてみたところ
が、夜遊びさ来たのにヨウキをぶつけらつて、ひどい目に
あつて死んだつて。蛇が人間のとこさ遊びさ来るなんちゆ
う馬鹿な話はあんめえけど、そうでたんだつて。

それで、そのヨウキが祟つてゐるつて。そして、そのヨウ
キをすつかり清めて、そしてちゃんと我が家の裏さね、お
宮をこさえて、そして祀つてあんだ。今でもあつて。そん
で、そのときからあそこを蛇(じやのくち)の口といつたもんだ。

大蛇の神の由来

(平沢)

今の根小屋というところの橋な、あそこには橋の堰(せき)にとめ
て、こつちやへ水を引いてたから。昔、お諏訪様のひむれ(昼寝)
してる太夫様がな、夜遊びして、夜遊んであるつて夜遅く
町さ帰つていつたんだ。そして、根小屋とこで見つと、
お諏訪様んとこ見たところが、今は切つてしまつてねえけ
んども、大きな杉があつたんだわ。何百年ちやあてえ杉が、
その杉の裏さ蛇がな、蛇の頭で蛇だな、角(つ)おいたるの。
そして、それが杉の木の裏からズーツと首出したのを見
せられちやつたんだつて。こんではなんねえと思つて、川
さ飛び込んで一生懸命からだを清めてみたら、いなくなつ
たんだつて。

それからあそこを大蛇の神とこつ言つたんだ。

大工の弟子が御神体を見たがる話 (宇津川)

昔な、うんと大昔だったんだとよ。そうして、その大工さんの弟子が、

「あのおー、御諏訪様の御神体を見てえ」

って言うてしようがねかったんだと。そうしたつげが、その親方は御神体見て(そうしたら)よつたらば、よつく水浴びてからだを清めて、そうして、行って 見て来て 言われたんだって。

そうして、(弟子は)水浴びて、今度は、からだを清めて行ったんだって。そうして、御諏訪様のキダ(階段?)ハシが三つになつてんだよ。

一段登つていぐ(行く)とまた一段、そうして今度、あの二段上がって行ったところが、そつちとこつちさす(またがって)ごい大きな大蛇が、そつちの木からこつちの木さこ(またがって)うまたがさつて、ひつかさつていたんだとこ(う)う。そしてたまげて、今度その弟子が戻つて来たんだって。そうして、親方に言つたらば、

「うんじや、御神体見てえなんて言うもんじやねえ。(お

まえ、それは)御諏訪様に見せられたんだ。(ここでは神主を太夫様っていうから)その太夫様に頼んでお詫びしてもらえ」

つて。そして今度、太夫様のとこ行って、頼んでお詫びをしてもらつてきたつて。

祭りの前にシモゴイをくんだ人の話 (宇津川)

御諏訪様のお祭りの前には、シモゴイをくんだり、コ(肥やし)イを運んではいけねえちゆう、言うてたわけね。ところが、その人は、御諏訪様の宵祭(よひ)りの日にシモゴイくんで、して、お参りにみんなと一緒に行ったわけ。

途中まで行つたら、御諏訪様の杉森の所に大蛇が見えて、その人しか見えなかつたの、その大蛇が。ほかの人には、見えねえわけ。そうして、御諏訪様お参りできなくて戻つ

て来ちゃったって、その人。昔はそういうことあったんだ。

うそつきの話

(瀬耳上)

御諏訪様の新築の話

(宇津川)

昔、下川内の御諏訪様 新築すつとき、おらのおんつあ太夫になったとき、そんなとき 下ささげてて新築したんだって。たんだって。

そうして、今度はちゃんと(新しい建物が)できて 移す申すとき、そうして 今度は 御諏訪様を移す申すときには、おらのおんつあ(おじさん)(太夫)は、わかんねえのな。だけど、ほかの人は みんな見たんだって、太夫様の肩さこんな大きな大蛇なんだと。ここさ(肩)乗って ちゃあんとこういう風にして(巻きついて)いたんだと。それが太夫様はわかんねえんだと。

そんなことがあったんだと、昔。

それは、上川内の人なんだけども、うそつきの人は。うそつき名人という仇名もらって。うそつきの竹松といただ。その人は、小さいときから、とつてもうそつきが上手だっただ。そしてあるとき、四区の方に来て、四区のある所に猪狩伊助という人、その人はずっと前に亡くなったが、その人が田んぼで田(田堀り)ふりしてたわけ。(そして)竹松さんが通ったわけだ。そうして、

「どこさ行くだ、竹松」

と言ったら、

「これからちよつと、あの、用足しに行くだ」

と。そして、

「わが(おまえは)随分、この、うそつき上手だつていう話を聞いてんけども、うそついて聞かせろ」

と言っただ、伊助じつじは、竹松さんに、

「いやあ、うそなんかついていっところねえ、まあ、忙し

くてしようねだ」

そして、

「あ、それはそうと、用頼まれて来たつたて、役場に何か用事あつから、来いって言ってよこした」

と、(伊助に) 言っただ。(伊助は)、

「大変だ」

と言って、その伊助じっじは仕事をやめて、役場に行ったのかな、きつと。それで、竹松は(小さい)ときだったから、少年だつて。

それでその、上の方へどつかへ用足しに行つて、帰つて来てみたらば、(伊助が) 役場さ行つて来ただと。伊助じいちゃんが。ほうして、

「竹松、こら、なんだうそばっかりついて。役場でなんか、来いって言わねえかつたがつた」

つて言つたら、

「うそついて聞かせろつて言つたから、うそついただけ」
つて言つた。

鍛冶屋の話

(持留)

ここから四キロメートルくらいありますかね。山向こうの部落なんですがね。そこに相堂い鍛冶屋さんだね、その鍛冶屋さんの姪っ子がいたらしいんですよ。それが全然、人にわからないように山の林の中に、地下に掘つたんですね、穴を。

そして、あの、まあどつからきん金を持って来たんだか、きん金のメッキとか、銀のメッキをやつていたらしいんです。ほいで、インチキなお金をつくつたので、小笹金というような名称があるとがあるんですよ。それが、だんだんここ相馬藩に知れて、相馬からいろいろな探偵が入つて来て、おじいさんに、

「いい仕事があるから、きん金のつくり方、小判のつくり方なんだけど、とにかくいいかね金出すから来てくれないか」
と言つたら、そうしたら、そのおじいさんは、非常に利口なじいさんで、

「私は農鍛治かじで、そういう金なんかはできません。金メッキとか、金財貨なんかやったことありません」

と言って、断ったといったような利口なじいさんだったということも聞いておるんですよ。

それで、そのじいさんは、ほとんど、この、刀の名器の名人で、ほとんどインチキな正宗の名刀とか、なんとかという名刀の切り口と同じで、偽物にせものが出回っていると聞いたことがありますね。それで東京で、これは正宗の名刀じゃないかと思っていると、東北の・・・(聴き取れず)・・・先生のインチキに彫ったものではないかというような、立派な鍛冶屋さんがいたということ聞いていますね。

瀬耳上せみかみの由来

(宇津川)

川内村の瀬耳上か・・・瀬耳上という名前は昔、田村郡

の大滝根に鬼が住んでたんだって。そうして、出て来て、悪いことばかりしてしよ(しよがなくて)なくて、そうして將軍様がこれを退治したんだ。そして今度、その退治した鬼の耳が川に流れて来たんだって、瀬耳上の川に。そこで、耳が流れて来たので、瀬せ、耳みみ、上かみとなったんだって、あそこは。そこでそれを今、瀬耳上せみかみといってんだ。

弘法様が酒を授けてくださる話

(堂小屋)

飲んでなくなっちゃった徳利から酒が出たときに、

「おっ、これは弘法様のお授けだ」

という。実は、いくらが残っていたんだろうが、ないはずのものが出たときなど、こういうことを言ったもんだ。

川内七不思議

(村内全域)

(一) 村誌に載せられたもの

- ① 胡麻を作らないわけ
- ② 干ばつの掛軸
- ③ けんかの盃
- ④ 化け物
- ⑤ くちなし蛭
- ⑥ 戸五川のさかさガマ
- ⑦ 田澤の薬水

(二) その他の例 (採話地)

- ◎ 泣きつら石 (堂小屋)
- ◎ のぼり石 (堂小屋)
- ◎ 二つ石 (堂小屋)
- ◎ さがり松 (堂小屋)

◎ キツネ火 (小田代)

◎ シダレ樅 (毛戸^{もつと})

◎ 雨竜の絵 (原)

【注】 七不思議は全村にわたってよく知られているようであるが、土地によって、その内容はまちまちである。今回の調査では、七不思議を特に詳しく調べなかつたので、ここに断片的にその概要を示すにとどめたい。

平伏沼の伝説

(大根森)

昔は、この辺は山の中だから、農家なんてなかったわな、昔は。狩やって、なになに獲って、それで暮らしていたわな、これ。そんなとき（人が）、平伏沼の沼の淵さ行って、大きな木の根元で眠くなって、鉄砲肩さこう担いで眠っていただ。

そうしたらば、上から何だかシタツとこうしたってきた。何だかと思って上見たらば、大蛇がこーい、こーいと言って、人を飲もうとしてた。鉄砲肩にかけていたから、ドーンと撃ったらば、口さぶちあつて、そしてその大蛇は死んで、沼あつたんだわな、あそこに、平伏沼。その沼さ落ちて死んじゃった。

そして、その人は気が狂ったみたいに家さ来て、病みついちやって、その人は死んじゃったです。

平伏沼の伝説

(持留)

天保時代に生まれたうちのおばあさんから聞いた話をしたいと思います。

平伏沼には昔、大きな大蛇が住んでいたらしいのです。それで、この一キロメートルばかり上手の山へ、先祖が鉄砲を撃ちに、この平伏へ行ったわけです。そうすると、そこに大きな石が二つあるんですよ。そうして、そこに木が繁っているでしょ。そこに一服してたわけです。

そのうちに自然に眠くなって、とろとろ眠ったわけですね。そうしたらば、大きな大蛇が口をあいて、だーっと（飲み込もうと？）したわけだね。それを今度、無我夢中で口あいたのを（鉄砲で）ドーンと撃って。そしたら大蛇は、撃たれて沼に入ったわけです。

すると、本人は、気が狂ったようにうちに帰って来て、三日も四日も気違いのようになって死んだわけです。大蛇もものすごく、七日七晩暴れ暴れて死んだつちゅう伝説

があるんですよ。

それも、私らが今から二十から四十年くらい前です。ね。どっかの大学が来て、この池の中を掘ったんですがね。そうしたら、やはり（大蛇の）骨が出たらしいんですよ。

いなっしやま（稲荷様）の崇り（た）（吉ノ田和）（よしのだわ）

梶山さんという人と豆田さんという人が、鉄砲撃ちだったんだ。そんなときに、毛戸（もうと）の今ダムあつとこさ稲荷様あったな。

その稲荷様がずっと前に、火災にあったわけだわな。火災にあつて（稲荷様は）行くとこなくて、この大熊町の方さ行って、子を産んだわけ。それを他から来た木挽（こびき）さんたちや、（キツネが）山さいるから、誰もそれを稲荷様だと思わねえわな。で、あんまりしかけなかつたんだな。それを

とつ（とつ）び一本で撃つたが、なかなか撃てねえで、あのころみんな大木だっただから、穴ある上の木さ上がつたと。

木さ上がつてると、稲荷様だから利口だわい。遠く、大きく、こういう頂上さ上がつて、穴を頂上だとすると、縁（ふち）を（回ってあがっていく）ずーつと上がるそうだな。それで二回目（に撃つとき）には、それよりまた上へこう登って行く。だんだんだんだんこう回つて、穴の所さ行つたら、（そこを鉄砲撃ちが）木の上から撃つたわけだ。

そんなとき、（撃たれたキツネは）男親だか女親だか、俺は子供だからわかんねえわな。（鉄砲撃ちの家）その家さ行って、遊んでい たつが、（キツネを）（かついで）かつつで来たわけだ。俺は初めて見たわけだ。キツネなんてもんわな。

親だけ撃つて、子はまだ小さいから、子は連れて来たわけ。子は二匹だったな。それで春先になったら、豆田さんという人の奥さんが、お産をすることになった。それで、お産で（子供を）楽しみにしてたら、こういうたらいに二つもカエルの子を産んだと。それは毛戸の稲荷様（キツネ）

を殺した祟りだと。

【みちくさ】 あおいはのほうれんそう

調査第一日目の第一軒目に訪問したお宅での出来事。そのお宅のおばさんは大変教育熱心な人で、息子さんも東京の某大学の教授をやっているとか。

一応、私達の調査項目の質問も聞き終わり、お茶を飲みながら世間話が始まりました。おばさんは引出しの中から、ある新聞の切り抜きを取り出して、私達に見せてくれました。その記事を読むと、どうやらいろいろな人から寄せられる投書欄に載っていた、ある人からの投書の切り抜きのようです。そこには、

『あおいはのほうれんそう』

をしつかり子供にしつけよう、ということが書いてありま

した。

『あおいはのほうれんそう』とは一体何かというと、

「あ」・・・ありがとう

「お」・・・おはよう

「い」・・・いただきます

「は」・・・はい

「ほう」・・・報告

「れん」・・・連絡

「そう」・・・相談

これらを子供達にしつかり身につけさせよ、ということ
です。

最近、子供の非行化が つとに目立つきなか、こういった
投書が寄せられたのでしよう。

それにしても、こういった記事をしつかり切り抜いてと
っておくという、このおばさん。やはり息子を大学教授に
まで仕立てた、本当に教育熱心な人なんだなと、つくづく
感じました。

【補遺】予備調査より

かぞえ歌

(平沢)

以下に、一九八二（昭和五七）年七月の本調査で採話した【うた】を主体とした『語り』、および、一九八二（昭和五七）年三月三十一日～四月一日の予備調査で採話した『語り』の中で主要なものを載せました。なお、文字化にあたり、読みやすく修正を加えたことをお断りしておきます。

世界で一番おつきい歌ちっちゃい歌

(久保)

天と地を だんごに丸め 手にのせて
グツと飲んでも 喉のどにさわらず
蚊のこぼす 涙に浮かぶ 浮島の
浜のお砂を 千々ちぢにくだきて

けんけんけんむり 煙いとけむり 糸煙

糸も通らぬ細道を

通れ通れとせめられて

通るながらもあさましや

小松の下に 昼寝して

松葉に刺されて 目がさめた

ここはどこよと ききたれば

鎌倉一の本屋敷

こつからだんだん しなの町

しなの土産に 何買ったもた

飴かお菓子か かんぞうか

・
・
・

てまりしりとり歌

(平沢)

清盛様は火の病 山へ登るは石童丸よ

丸い卵は切りようで四角 とかく浮世は色と酒

サゲニスズムワせんないせんでごもん

ごもんどちやいいが油かえ茶かえ

ちやかえ山から谷底見れば

見れば目のとく齒の薬

くすりや峠の権現様よ

さまよ三度笠(三味線)みや猫の皮

かわいオツボはゆかしさに

ゆかしゆかしはその昔

じさまとばさまがあつたとき

あつたらさの観音様一寸八分

八分されても二分残る

残るかっぱうそとが浜

はまでかっきるような毛がはえた

はえたからださげたあしだ

あしだ通れば二階でワネガ

姉は二十一妹は二十

裸足で道中がなるものか

百合若大臣ゆりわかだいじん

(久保)

百合若大臣が別府太郎・次郎の二人の弟子を連れて、海に出かけた。ある日、船が沈没して島に上陸した。何も食べるものがないため、百合若大臣は眠ってしまった。

そこで、(太郎・次郎の)二人は大臣をおいて、勝手に帰ってしまった。大臣はその後、魚を食べたりして、三年ばかりそこで暮らした。

あまりの悲しさに大臣は一つの歌を詠う。

長きせの

とうのねふりのみな目覚め

波乗り船の音のよきかな

すると、鷹が木の葉を持って来て落としていった。百合

若大臣は、自分の指を噛み切って血で、

「船を出してくれ」

と頼んだ。その木の葉を鷹が持ち帰り、船を出してもらって、やっと百合若大臣は救出された。

その頃、百合若大臣を置いて先に帰った別府太郎次郎の二人は、弓の親方になっていた。百合若大臣は、彼らの弓道場へ出かけた。だが、島で三年間も暮らしたため、外見が無精たらしくなり、彼が百合若大臣だとは、二人にはわからない。

しかし、その道場には、百合若大臣でなければ射ることが出来ないといわれる、とてつもなく大きな弓があった。

そこで百合若大臣は、その弓を射って、自分が百合若大臣

だということを二人にわからしめ、そして懲らしめた。

(舞、浄瑠璃、歌舞伎などによって広く流布された伝説)

金敷かなしきの話

(久保)

ある日、鍛冶屋の男が金敷を質に入ってしまった。しかし、また返してもらいたくなくて、質屋に自分の金敷を返して欲しいと言ったところ、質屋は、もうお前の金敷は、流れてしまったと言った(実はまだあった)。男は、悲しんで歌を詠う。・・・(録音不良で不明)・・・

その歌を聞いた質屋は、あまりの歌の素晴らしさに(感動し)、男にただで金敷を返した。

河童の話

(子安川)

代掻しろかきをして泥だらけになった馬を川に連れて行き、泥を落としてやろうとしていると、川から河童が出て来て、馬の手綱と自分の体を結んで、馬を川へ引つ張り込もうとしました。

しかし、逆に河童は引きずられ、馬小屋まで引つ張られてしまった。河童はその家の人に頼み、命からがら川に帰ることができた。それ以来、河童は姿を見せないという。

(久保地区であった話)

キツネの話

(子安川)

(一) キツネ火

山に小さな光が点滅すると、それは、キツネが馬の骨を

啜くわえて、キツネのよだれが光って見えるのだと言われた。

(二) 人をだます話

キツネが子供や母親に化ける。母親から饅頭まんじゅうをもらったつもりが、実は馬の糞だったなどということもあつた。

糠塚ぬかづかと金の鶏にわとり

(吉ノ田和)

長者が糠を捨ててできた塚に、長者は、愛宕様を祀っていた。

御神体の金の鳥は、塚中に埋まっていると言われた。また、奇妙なことに鶏は、この塚の上では、時ときをつくらなくなるので、一切鶏を飼わなくなった。

蔵よりも木を高くしない話 (吉ノ田和)

いっだったか、牛馬に仔こが生まれなくなるなど、よくないことが続いた。思い立って、蔵より高くなっていた木を切ると、仔も生まれるようになったので、木は蔵より高くしないようにしている。

白い動物を飼わない話 (吉ノ田和)

氏神として『いなっしやま』を祀っているが、御神体のキツネが白いので、白い動物は飼わない。

地名の由来あれこれ (高田島)

(一) 小塚

上の沼に蛇がおつて、下の沼につぶタニシがおつただと。そいつらがケンカして火事になって、七日七晩燃え続けたそうだ。蛇が負けてな。上の沼が流れてきて山になった。それが小塚という名前のおこりだそうだ。

地名の由来あれこれ (高田島)

(二) ゼニ沢

ゼニを作っていたのでこの名がついた。

地名の由来あれこれ (高田島)

(三) ぬかまぐら山

八幡太郎が馬にぬかを食わせた山。

地名の由来あれこれ

(高田島)

(四) うまあらいど

八幡太郎が馬を洗った所。

地名の由来あれこれ

(町分)
まちわけ

(五) はたまき

いくさのときに旗をまいた。

地名の由来あれこれ

(町分)

(六) 平伏沼
へぶすぬま

いくさのとき、兵が伏した。

【川内村の民話（話者名と題名）】

※話者の居住地区
 (上川内・高田島) 遠藤マツミ

「地名の由来あれこれ」	九四
(一) 小塚	九四
(二) ゼニ沢	九四
(三) ぬかまぐら山	九四
(四) うまあらいど	九五
(上川内・久保) 秋元シゲノ	
「うそつき息子の話」	一〇
「うばすて山」	一四
「親孝行の話」	一五
「馬鹿むこの正月まわり」	二四
「馬鹿むこと団子」	二八
「長い話」	四九
「世界で一番おつきい歌ちっちゃい歌」	九〇

(上川内・久保) 秋元ソノ

「百合若大臣」
 九一 |

「金敷きの話」
 九二 |

(上川内・林) 秋元キチ

「キツネにばかにされた話その二」
 七〇 |

(上川内・林) 秋元衣子

「キツネ火その二」
 七〇 |

「キツネの話」
 七一 |

(上川内・関場) 渡辺好之

「馬鹿むこの山賊退治」
 三四 |

(上川内・長網ながあみ) 堀本武雄

「うばすて山」
 一四 |

「キツネ火その一」・・・・・・・・・・・・・・・・七〇

(上川内・沢) 横田ゆたか

「蛇のむこ入り」・・・・・・・・二〇

「馬鹿むこの見合い」・・・・二二

「馬鹿むこと備前焼」・・・・二五

「馬鹿むこと菜っ葉」・・・・二七

「馬鹿むこと団子」・・・・二九

「桃太郎」・・・・・・・・四一

「花咲かじじい」・・・・四三

「かちかち山」・・・・四五

「虎(山猫)が化ける話」・・・・五一

「化けネズミの話」・・・・五三

(上川内・早渡) 井出憲司

「化け物の話」・・・・五五

「ひとくちばなし」・・・・五六

「昔ばなし(旅人殺しの話)」・・・・五八

(上川内・町分) 井出正人

「地名の由来あれこれ」・・・・九五

(五) はたまき・・・・・・・・九五

(六) 平伏沼・・・・・・・・九五

(上川内・持留) 三平一治

「キツネの嫁入り」・・・・七一

「鍛冶屋の話」・・・・八四

「平伏沼の伝説」・・・・八七

(上川内・大根森) 西山福馬

「平伏沼の伝説」・・・・八七

(上川内・大根森) 西山ミヤ子

「キツネにバカにされた話その一」・・・・六八

(上川内・瀬耳上) 新妻ツヤ子

「馬鹿むことたくあん」・・・・・・・・・・二五

「馬鹿むこと団子」・・・・・・・・・・三三

「うそつきの話」・・・・・・・・・・八三

(上川内・子安川) 秋元トメノ

「河童の話」・・・・・・・・・・九三

「キツネの話」・・・・・・・・・・九三

(下川内・堂小屋) 西山忠

「まんじゅう問答」・・・・・・・・・・八

「うそつき名人の話」・・・・・・・・・・一一

「かえる女房」・・・・・・・・・・一六

「猿むこ入り」・・・・・・・・・・一六

「蛙と猿の競争」・・・・・・・・・・二二

「馬鹿むこと団子」・・・・・・・・・・三〇

「運のよいむこ」・・・・・・・・・・三五

「狸の仕返し」・・・・・・・・・・三七

「屁ひり女房」・・・・・・・・・・三九

「千匹のねずみが京見物に行く話」・・・・・・・・四八

「ふんどしの川流れ」・・・・・・・・・・五七

「しだれ櫓の由来と金の鶏」・・・・・・・・・・六〇

「法印様とキツネ」・・・・・・・・・・六一

「だいらギツネの話」・・・・・・・・・・六六

「カワウソとキツネ」・・・・・・・・・・七三

「大蛇のたたり」・・・・・・・・・・七六

「松川原堤の大蛇退治」・・・・・・・・・・七九

「弘法様が酒を授けてくださる話」・・・・・・・・八五

(下川内・宇津川) 西山タマヨ

「馬鹿むこと団子」・・・・・・・・・・三二

「カカトはずし」・・・・・・・・・・四一

「キツネに化かされた話」・・・・・・・・・・七二

「カイコ様の話」	七五
「大蛇のたたり」	七六
「大工の弟子が御神体を見たがる話」	八二
「祭りの前にシモゴイをくんだ人の話」	八二
「御諏訪様の新築の話」	八三
「瀬耳上の由来」	八五

(下川内・平沢) 志賀タン

「河童駒引き」	一一
「猿のむこ入り」	一九
「馬鹿むこと頭巾」	二七
「馬鹿むこと団子」	三一
「おならの身がわり」	三八
「木挽きとゴウシユウさん狐」	六六
「小学校の先生とゴウシユウさんギツネ」	六八
「大蛇のたたり」	八〇
「大蛇の神の由来」	八一

「かぞえうた」	九〇
「てまり しりとり歌」	九一

(下川内・吉ノ田和) 柘田己佐雄

「いなつしやまの祟り」	八八
「糠塚と金の鶏」	九三
「蔵よりも木を高くしない話」	九四
「白い動物を飼わない話」	九四

(村内全域)

「川内七不思議」	八六
----------	----

【編集後記】

正直のところ、春の予備調査が終わった後、私達は今年の民話集の発行は無理なのではないかと思っていました。

しかし、夏の五日間の本調査で聞かせていただいたお話は、百話近くにもなりました。その中から選んだ話を載せて、ここに「だんごだんごがどっこいしょ」（福島県双葉郡川内村の民話）が出来上がりました。

最後になりますが、民話の採集にあたって川内村の皆さんには大変お世話になりました。紙面をかりてお礼申し上げます。

（一九八二年十一月）

【覆刻版編集後記】

「だんごだんごがどっこいしょ」覆刻版制作にあたり、令和元年の九月、川内村村議会の関係者の方々から方言などについて解説と助言をいただきました。ここに御礼申し上げます。

（二〇一九年十一月）

【日本文化研究会 民話分科会名簿】

人文学部三年	遠藤 勉
教育学部二年	飯塚 恵一
教育学部二年	石川 千春
文学部一年	栗原 良恵
ほか	一名

『だんごだんごがどっこいしょ』

(福島県双葉郡川内村の民話)

【発行者】 千葉大学日本文化研究会 民話分科会

【発行日】 一九八二年(昭和五七年)十一月一日

リポジトリ公開用覆刻版

『だんごだんごがどっこいしょ』

(福島県双葉郡川内村の民話)

【覆刻版発行者】

千葉大学(旧) 日本文化研究会民俗資料編纂室

代表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】 二〇一九年十二月二日

<https://doi.org/10.20776/106360>